

リアルで恵まれた容姿だったけど、Vtuber活動したっていいよね？

灰猫ユキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【本編】

言葉足らずなダウンナー姉×妹扱いが嬉しいけど妹以上になりたい妹Ⅱ百合

【蛇足】

Vtuberグループ「メモリーズ」を中心とした百合物語

※小説家になろう、カクヨムとマルチ投稿です。

※現在蛇足の更新が止まっていますが、本編部分は完結済みです。

目次

本編

【祝1周年】みんなありがとう。活動1周年記念凸待ち【灰猫ユキ】	1
【はやラジ！】第4回 ゲスト・茜坂マリ【メモリーズ4期生／早川はやて】	13
【ユキはやオフコラボ】初オフコラボ。内容未定。緊張する【灰猫ユキ／早川はやて】	28
蛇足	
初めての友達	44
一ノ瀬柚子のお悩み相談室	57
【はやラジ！】第6回 ゲスト：一ノ瀬柚子【メモリーズ4期生／早川はやて】	70
紅色少女から秘密の便り	84
1つになれなくても	92
茜色少女の葛藤	102
0 × 1 Ⅱ	114
幸せへ続く道の選択	127
【緊急オフコラボ】後輩が家にやってきた【一ノ瀬柚子／茜坂マリ】	131
嵐の前の	141

本編

【祝1周年】みんなありがとう。活動1周年記念凸待ち【灰猫ユキ】

「はい」

『はい』『はい』『はい、どーもー』『はい』『わこつ、初見です』『はい』『はい』『はい』『はい』

『ユキちゃん今日も配信出来て偉い！』『ユキちゃんおめでとう！』

私が放った平仮名2文字で構成されるちっぽけな言葉を、画面の向こうにいる顔も知らない誰かが文字に変換して送り返してくる事に違和感を覚えなくなつて、もう暫く経つ。

その事に何か特別なことを成し遂げたわけでもないのに、不思議と気分が高揚してくる自分がいた。

いや、特別ではないが成し遂げたことはあった。ただ1つの趣味——世間一般の会社員や主婦を始めとする皆様から職業と認められれば、今すぐにでも私の職業は配信者ですと外に出て声を張り上げ主張したい程には好きだ——である『Virtual You tube r』活動が今日で活動1周年という節目になったのだ。

「というわけでね、今日は1周年記念配信です。皆さん配信前からおめでどうコメント、スパチャなどありがとうございます。私が1年続けてこれたのも、あつたけえリスナーさんがついてきてくれたおかげです。本当にありがとう」

『ユキちゃん好き』『最近見始めたけどユキちゃんすこなんだ』『ユキ……大きくなったな……』『泣いた』『俺も泣いた』『始まって3分だけど泣いた』『ユキリスナーの涙腺はボロボロ定期』『お前らいつも泣いてんな、俺もだけど』

昔から感謝の言葉を素直に伝えることが得意ではなかった私だけど、今日みたいな日には少しくらい素直になるのも悪くないかもしれない。

もしかしたら素直じゃないのはリアルの可愛げのない私だけで、今画面に映っているヴァーチャルの私は素直になれる子なのかも。まあ、どちらも共通して表情筋があまり仕事してくれないのだが。

「二応だけど記念枠だし、何やろうかなって悩んでただけど……今日は初めての凸待ち配信をやってみようと思うね」

『鳩で呟いてた告知見た時から楽しみに待ってた!』『ユキちゃん友達あんまいなそうだけど、大丈夫なんですかね……』『それな』『いやいやいや、誰も来ないなんてことはないでしょ……ないよね?』『凸待ち 0 人』『何が悪かったんですかねえ……(交友関係壊滅)』

「とりあえず誰かが来るまでは雑談でもしてようかなって思ってたんだけど。誰も来なかったら1周年記念は雑談配信で終わりだね」

『ぼっちで迎える2年目悲しい……悲しくない?』『ユキちゃんの連絡先知ってる誰かー! 早く来てくれー!』『地球人では最強格のハゲもよう見とる』『雑談配信が嫌いなわけじゃないけど、1周年でそれはなあ』『もう駄目だ……おしまいだあ……』『ベジタブルな惑星のM字ハゲ王子もよう見とる』『この枠Z戦士多くて草』

予め予想していたリスナーからの杞憂コメントを用意していた返しで対応したが、実際のところ誰も私に凸して来ない展開にはならない事を、私は知っていた。

同じ事務所に所属しているV t u b e rの誰かをお願いしたとか、サクラを用意してあるとか、そういう話ではなく。ただ知っているだ

けだ。言葉で確認を取ったわけではないが確証がある。言葉がなくとも目を見ればわかるし、目を見なくても空気でわかる。だって、私とあの子は特別だから。

「そんなに直ぐ来るとは私も思っていないし雑談しよっか。最近マシマ口返してないから、それ消化しちゃうね。あつ、この前のライブイベントについては別枠でちゃんと話す予定だから安心して」

『ちようどマシマロの在庫切らしたから助かる』『安心した』『ステージ上のユキちゃん最高だった……』『ユキちゃんのお歌初めて聞いたけどすこすこでした』『3Dであんなつよつよダンスとお歌見せられたらファンになっちゃうじゃないか』

「うん、ありがとう。とりあえず今日はライブ感想枠じゃないからここまでね? ……じゃあマシマロ返していきたいと思います。えーと」

『あつ』『きちちゃ!』『凸0回避』『さー、誰だ誰だ?』

サブモニターでは誰が来たのかとコメント欄が騒ぎ立てている。

私はそれを横目に見つつ、メインモニター上で表示されている凸相手の名前を確認したが、もちろん予想していた相手と違うことはなかった。

まだ枠が開始して10分程なのだが、私にとってはこれが今日のメインイベントであることは間違いない。こうして枠を取った手前大きな声で言いづらいが、この電話が終わった直後に枠を閉じたっつい。

授業も部活も終わった後の学校なんて好きで残る人なんていないし、犯人を捕まえてエンディングが流れた後の推理ドラマなんて次回予告程度でいいのだ。

とはいえ、流石にそれをやってしまうと私が炎上してしまうので枠

自体は1時間〜2時間を目安に取るつもりだ。記念枠で炎上するほど物好きではない。

「あつ、繋がった！ もしもーし？」

「はい。じゃあまず自己紹介をお願い」

「はーい！ ユキリスのみんな、こんばんはやてー！ メモリーズ4期生の早川はやてだよー！ ユキちゃん、活動1周年おめでとう！」
『はやてちゃん！』『はやちゃん来た！』『ユキ……良い後輩を持ったな（腕を組みつつ静かに涙を流す）』『お前誰定期』『ユ涙ガ』『ユキはやてえてえ』『ユキちゃんと1番仲良いし、早川ちゃんが来るのは妥当か』

「はい。というわけでね、うちの事務所の後輩である早川はやてが来てくれました。はやて、今日は来てくれてありがとうね。ちよつとは誰も来ないかもって思ったりもしたから嬉しいよ」

「うーん、あたしも誰も行かない方が面白いかなーって思ったんだけど……折角お祝いの配信だからね！ トップバッターで行かせてもらいました！」

「正直、はやては来てくれるかなっても思ってたから、そこまで心配はしてなかったかな。これで本当に来なかったら泣いてたかも」

「ユキちゃんを泣かす奴は許さないよー！」

『でも泣いてるユキちゃんとかレアだし見たい気も』『かわいそうなのはNG』『まあ俺もはやてちゃんは来ると思ってたよ』『はやはや、まだデビューして半年くらいなのにユキちゃんとのコラボ回数10回超えたしな』『同期コラボより多いの草』『ユキちゃんもコラボの半分近くがはやちゃんだしなあ』

彼女と話す傍らで、事前に用意していた早川はやての立ち絵を配信画面上に表示させた。

こうすることです。リスナーにとっても、私にとっても今話しているのは早川はやてなんだと認識することができる。とても大事なことだ。

まあこの枠に来る時点で、私の声を聞けばアッシュグレイのロングをした表情筋があまり仕事しない釣り目猫耳女が出てくるはずだし、彼女の声を聞けば黒髪セミロングのブレザー美少女が出てくるはずだ。

それでもV t u b e rという形式上、大事なものだと思う。体と魂、どちらが欠けてしまっても意味がないのだから。

「今日は凸に来てくれた人に対しての質問を考えてあるんだ。はやて、お願いしてもいい?」

「もつちろん、ユキちゃんのお願いだもん」

『即決はやちゃん』『凸も即行だったし、はやちゃんユキちゃん大好きじゃん』『それが何か問題でも?』『いいや?』『いいぞもつとやれ』

「じゃあ早速1つ目、あなたは私をどこで知りましたか?」

「うーん、最初からかな?」

「2つ目、あなたから私の印象は?」

「優しくて頼りになるお姉ちゃんみたいな人!」

「3つ目、あなたから私に直してほしいところは?」

「もつと遊んで!」

「4つ目、あなたから私に直してほしくないところは?」

「名前呼び好きだからそこかな?」

「最後5つ目、私とあなた……はやての関係を一言で表すとしたら?」

「先輩と後輩とか、同業者とか色々あるけど……今は姉妹みたいって言われるのが1番のお気に入りかな!」

『ユキはやてえてえよお……』『うーん、これはいいユキはや』『俺たちは何を見せられてるんだ』『イチヤイチヤしゃがって! もつとやってください!』『はやちゃん答えるの早すぎて草』『最後以外全然迷わなかったからな』『ダウンナーな姉と元気妹いいぞく』

「こんな感じで質問していくから、これから凸に来る予定の方がいたらよろしくね。……さて、それじゃあそろそろ切ろうか。改めてありがとうね」

「ユキちゃんの為なら、たとえ火の中水の中なんちゃらの中だよ！
また遊ぼうね！」

「うん、また今度。あつ、皆はやてのチャンネルも登録お願いね」

「お願いしまーす！ 早川はやてでした！ おつはや！」

『おつはや！』『おつはやちゃん』『おつかれー』『登録したぞー！』『俺も登録した』『また2人のコラボ待ってるねー！』

2時間ぶりに帰還したりアルだが、初めての思考がもう少し配信していたかったな辺り、私はどうやらV t u b e rという趣味が心底好きらしい。

この趣味を始めたばかりの頃は、ここまでハマるとは思えなかっただろう。

高校を卒業して半年も経つのに自宅を警備しているのも退屈していた頃に、暇つぶしに見ていたV t u b e rのオーディションがあるという話を聞いて面白半分で応募したただけだったのに。

応募していた企業が業界では大手（とは言ってもまだ黎明期だったし、所属は10人もいなかった）だったこともあり、期待はしていなかったが特に何事もなくデビューまで漕ぎつけてしまった。事務所としては2期生、今となっては業界全体で見てもけっこう先輩と呼ばれる立ち位置まで来ていた。

最初は、リスナーとして楽しんでいたのと配信者として楽しめるかは別ではないかと思いきや不安だったが、初配信の後にはそんなものが消

え去っていた。

そこにあつたのはただ純粋な楽しさと、応募した時の面白半分のもう半分、ヴァーチャルでならリアルで得られなかったものが得られるかもしれないという期待だった。

「アヤカ、入っていい?」

私は自分で言うのもなんだが、恵まれた容姿を持って生まれてきた。

容姿と、あとは家族運くらいか。それらを得る犠牲として表情筋は仕事をサボりだすし、勉強はできた頭も語彙力だけは養われなかったみたいで、家族以外とまともに意思疎通ができた記憶がほとんどない。

学校という集団生活で意思疎通ができないのは中々不便だったが、幸い私には私と違ってコミュ力が高い1つ年下の大切な、こんな私をよく慕ってくれる大切な妹がいたおかげで助けられた。

だが高校に入学直後くらいに、私の顔だけを目当てに寄ってきたクラスの中心的な位置にいた生徒の誘いに乗ったのが終わりの始まりだった。

私の顔と、自分たちがまあまあ近所では有名な女子高に通っているという餌を用意した彼女は、別の高校の男を漁り始めたのだ。

だが魚たちは私という餌にばかり食いついて彼女には一切興味なし。そのまま逆上した彼女は私の根も葉もない噂を学校中に風潮して、それを釈明もできない私は3年間無視される高校生活を送った。

「アヤカ? ……寝てるわけ、ないよね? 開けるよ?」

まあそんな顔も名前も覚えていない女に起こされたことなんてどうでもいいのだが。

自分が原因で起きたことだから結局は私が悪いわけだし、私と同じ高校に入ろうとした妹を流石に針の筵にされている姉がいる高校に通わせるのとは思って止めさせたのも、私が悪い話だし仕方ない。

その時に家族には高校での私の扱いを説明しなくてははいけなかったが、私としては多少不便なところがあるくらいで特に気にしてはいなかった。それよりもこれを説明された家族（特に妹）を相手する方が何倍も面倒だった。

実際妹の説得は面倒だったが、なんとか認めさせることができて妹は別の高校に通うことになった。

その後は特に語ることもなく、何も変わらない毎日を消費して高校を卒業した。

「配信なんて終わってるのにPCの前で何をぼーっとしてるの？ あたし何回も名前呼んだのに返事もしないし」

「ん、ごめん花菜」

「……昔の事、思い出してたの？」

「まあ、そんなところかな」

高校を卒業した後は、特にやりたいこともなかったというか。今思うとリアルの世界に特に興味を持てなかったんだろうなって。あと、特に気にしてはなかったけど心は疲れてたのかも。

そんなわけでちよつと人生の休息を取っていたわけだけど、ここでV t u b e rと出会って暇つぶしで見始めていつの間にかハマって以下略。

リアルなんて家族以外はどうでもよかったし、特に未練らしい未練もなかったからヴァーチャル世界に抵抗もなかった。未練とか言うて死ぬみたいだけど、別に死ぬわけでもないから余計に。

ただ見た目が変わって名前が変わって世界まで変わったら、ちよつとは性格もマシになってリアルとは違う道を歩けるかなという希望を持って歩き始めた。

結果としてはそんな簡単な話じゃなかったけど、今日の凸待ちに合計5人も来てくれたってことが全てだ。1年でここまで歩いてくれた私が少し誇らしい。

「どうせ本人が気にしてないし、あたしからは昔のことは何も言わないよ。ただあたしにとっては思い出したくもない話なの。だからアヤカもあんまり思い出すのやめて」

「うん、わかったよ」

「……こんな話したくて来たわけじゃないのに。改めてだけど、ユキちゃんの活動1周年おめでとう。どうしてもリアルでも言いたくて……」

「ありがと、花菜。あっちでもありがとね。来てくれて嬉しかった」

V t u b e r になって半年ほど経ったある日、私にとって2度目の後輩ができる機会があった。

時期的にはちょうど桜が咲き始める頃だった。そこで私は18年間ほぼ毎日顔を合わせてきた妹と2度目のはじめましてをしたのだった。

昔から私の後を付いてきたがった妹は、自分の高校卒業直後にV t u b e r という生まれて間もない不安定な道に進んできたのだ。

当然私としては反対したのだが、家族と事務所ですでに決定している以上そう簡単には取り消しなんてできるわけもなく、私と一緒に遊びたかったからというだけの理由で妹はヴァーチャル世界に足を踏み入れてしまったのだ。

「でも最終的に5人も来てたじゃん。あたしが行かなくてもよかったんじゃないの?」

「ううん、花菜……はやてが来てくれて嬉しかった。本当に」

「本当に? じゃあ他の4人が来て嬉しかったの?」

「……もちろん」

「なんで? マリ先輩も柚子ちゃん先輩も林檎先輩も、サキちゃんも血が繋がった家族じゃないの?」

「だって彼女たちは、私の友達だから。ヴァーチャル世界でだけ出た、私の大切な友達だから。それに……」

「……………」

「灰猫ユキと早川はやてだって、血が繋がっているわけじゃない」「っ!」

初めはただ私と一緒に遊びたいからとヴァーチャル世界に入ってきた妹だったが、それとは別に気付いたら同期に当たるメモリーズ4期生の中心的人物にまでなっていた。

それを私は妹の天性の才能によるものだ和理解していたし、姉としてはとても誇らしかった。ユキとしても、最近入ってきた話題の後輩達の中心人物が私に憧れてこの世界に入ってきたということもあり、姿形は違えど感じる嬉しさは同じだったのを覚えている。

様子が変わり始めたのは、早川はやてがデビューした後に初めて行われたユキと他ライバーとのコラボ配信の後。

配信が終わり、コラボ相手との通話も終了した直後。狙ったかのようなタイミングで、花菜が部屋に入っていていいかと尋ねてきた。特に断る理由もなかったので許可したのだが、入室してきた妹の様子がおかしいなことに一目で気付いた。

話を聞くと、どうやら私がヴァーチャル世界で誰かとコラボ——つまり、友達と一緒に放送していることに嫉妬したらしい。

私がヴァーチャル世界に友達がいること自体は知っていたらしいが、前はそれを見てもよかつたなくらいしか思っていなかったらしい。

それが自分がV t u b e rとなってみると嫉妬した、と。

「ユキとはやては血が繋がっているわけじゃない。だから、それが喜びを否定する理由にはならないよ」

「わかってる！ 確かにユキとはやては姉妹みたいって言われてても、実際にはただの先輩後輩だって！ でも、あたしが否定したっていいでしょ!?!」

「確かに私にとつては花菜が世界で1番大切だけど、ユキにとつてはやては友達の1人だよ。友達同士、優劣は付けないつもり」

「あたしはあたしでしょ!?! あたしは妹なんだから鼻糞してよ！ 他の女の子とは違うんだから！」

「高森花菜と早川はやては別人だよ。高森彩華と灰猫ユキも別人。それが全てなんだ」

「ちがう！ あたしはあたしで、アヤカはユキちゃんなの！ だからあたしのことを1番に見てくれないとおかしいの！」

あの時も、嫉妬の原因が妹としての立場と事務所の後輩としての立場で物の見方が変わったからだと言いつつ、言い争いに発展した。

ヴァーチャルとリアルを別物だと主張する私と、同じだと主張する花菜。

奇しくも妹に押し倒されるところまで同じ展開になってしまったが、こんなところまで再現しなくていいのに。ベッドでなく床に押し倒されているから、背中が痛くて仕方ない。

言い争いの末に私を床へ押し倒した妹は、最終的に私のファーストキスを奪っていったがそれはどうでもいい話だ。

姉妹じゃないならいいよね、とか言いつつ私の唇を何度も味わっていたが、今はリアルなんだから姉妹だとか、そもそも女同士でキスすることがおかしいとは思わないのだろうか。他人には興味がないが、大切な妹の気持ちに気付かない程には姉失格でないのだから。

「……ねえ花菜。いくつか質問していい？」

「……下らない質問してきたらキスするけど、それでもいいならいいよ」

「じゃあ、早速1つ目。あなたは、私をどこで知りましたか？」

「……そんなの、最初からに決まってるじゃん」

「2つ目、あなたから私の印象は？」

「優しくて頼りになつて綺麗でかつこよくて大好きなお姉ちゃん」

「3つ目、あなたから私に直してほしいところは？」

「あたし以外を見ないで。妹扱いたくないで」

「4つ目、あなたから私に直してほしいところは？」

「あたしを大切な妹扱いしてくれるところ」

「最後5つ目、私とあなた……花菜との関係を一言で表すとしたら？」

「あたしと、アヤカの関係は……」

この後、花菜は私にキスしてくることで答えを示してきたが、それはどうでもいい話だ。

なぜなら私としても花菜とするキスは嫌いじゃないし、拒んだこともない。

普通は女同士、しかも血の繋がった姉妹でキスをするなんて異常なはずだが、私にとってはどうでもいい。

だって、好きな子とするキスすることの何がおかしいのだろうか。

何もおかしくない、ただのありふれたどうでもいい話でしかない。

だから私にとって花菜とのキスはどうでもいい話だ。

【はやラジ！】第4回 ゲスト・歯坂マリ【メモリーズ
4期生／早川はやて】

あたしとアヤカの関係は1つ歳の離れた姉妹だ。

この変わることの無い事実で満足できなくなつて、どれくらい経つだろう。

今はもう血の繋がった姉とキスをすることに忌避感もない。そんなことよりもアヤカと触れていたい。離れないで。知らない貴女にならないで。

だから、あたしが知っているアヤカと変わっていないか確かめるためにキスをする。

キスをしている時間だけでも、アヤカの世界をあたしで独占したい。

あたしの大好きな人と明確に繋がってほしい。

「私とあなた……花菜との関係を一言で表すとしたら？」

一言でなんて言い表せるわけがないのに、アヤカの意地悪。

「あなたから私に直してほしくないところは？」

あたしのことを大切に思ってくれているのを知っている。妹としてだけ。

「あなたから私に直してほしいところは？」

でも妹扱いはもう嫌なんだ。アヤカの妹っていう特別より、もつと上の特別になりたい。

「あなたから私の印象は？」

あたしのことを振り回す、世界で1番愛おしい人。

「あなたは、私をどこで知りましたか？」

そんなの、最初からに決まってるでしょ？

あたしがあなたを好きだったのも、きっと最初から。

はつきりとした記憶があるのなんて幼稚園とかそのくらいからだけど、その頃からお姉ちゃんは1つしか歳が離れていないとは思えない程大人びていた。

他の子とケンカなんてまずしなければワガママも言わないものだから、先生たちは手のかからない良い子どもか、気味の悪い子扱いしていたのをよく覚えてる。

その頃からお姉ちゃんの後ろを付いて回っていたあたしは、他の子たちが外で走り回っている時もお姉ちゃんと一緒に中で本を読んでいた。大勢の知らない子たちより、1人の血の繋がった姉さえいれば何もいらなかった。

ただ、先生たちはあたしがお姉ちゃんと違って普通の子だということを見抜いていたらしい。何度も他の子たちと一緒に外で遊んできたら、と言われた。

その度にあたしは、お姉ちゃんと一緒じゃなきや嫌だと言っていた。今思うと、この頃からあたしはお姉ちゃんに依存していたらしい。

それを見かねたのか、それとも先生から何か言われたのか。お姉ちゃんに言われて、1日だけ他の子と一緒に外で遊んだ。

本当はお姉ちゃんと一緒にがよかったけれど、外で元気に遊んでいる花菜が見たいと言われたら、単純なあたしは張り切って外に駆け出したのだ。

その1日であたしは幼稚園の子たちの中心人物になってしまい、結局その後卒園するまでお姉ちゃんと一緒にいることを周りが許してくれなくなった。

お姉ちゃんに1年遅れて小学校に入学して、あたしはお姉ちゃんの意味疎通係を任命されることになった。

小さな社会生活を送ることになる小学校では、1人異端者がいると全体が迷惑するらしい。

あたしが入学するまでの1年の間で、先生たちは相当まいつていたのだろう。あたしが呼ばれて通訳してあげると、大層感謝された。

あたしとしては、お姉ちゃんは確かにちよつと言葉足らずなだけに、なんで誰もわからないのが不思議でしようがなかった。

だから、あたしがお姉ちゃんのことを1番よくわかつていることが当たり前だけど嬉しかったし、お姉ちゃんをおかしいもの扱いする社会なんて出たくないと思った。

だけとお姉ちゃんは、あたしが小学校で誰かと遊んだり話しているところを見ると嬉しそうだったから、頑張って普通を演じた。

お姉ちゃんが喜ぶから友達もたくさん作ったし、お姉ちゃんが喜ぶから先生たちにも良い印象を与えた。勉強も運動もクラス委員も、とにかくなんでもやった。友達や先生が褒めてくれるのなんてどうでもよかったけど、お姉ちゃんが褒めてくれるから全部頑張れた。

中学生になると、あたしの周りでも異性を意識するのが当たり前になってきた。

ちよつと前までは日曜朝の魔法少女アニメだったり、昨日の夜見たテレビの話をしていた友達が、今は男の話しかしなくなってしまう

た。

もちろんあたしだって、男という存在がいるのは知っている。

毎日父親と顔を合わせているし、小学校の高学年で性教育も受けたのだから。

でも、あたしにとっては男性がよくわからなかった。

1番身近な男性である父親は除外するとして、自分の頭の中では男性の顔に白い靄がかかっているみたいなの、何とも言えない違和感が常にあった。

誰かがかつこいいとか、そのくらいならまだ問題なかった。それが付き合いたいとかに話が発展すると、自分の頭ではエラーを起こして理解不能になる。

それは異性と付き合うなんてまだ早いとかいうお堅い思考でも純情な思考でもなく、ただ自分の常識にはない話だった。彼女たちは自分と違う世界の住人だった。

しかし世間から見たら、違う世界の住人はあたしの方なのは明確で。社会は自分と違う存在を許してくれないことを知っていたから、あたしは普通になろうと必死だった。

初めてあたしが普通じゃないと知った日。

その日は中学が休みで、あたしは特にやることもなくスマホを弄っていた。

友達との何も中身のないやり取りも終え、姉の部屋にでも行って甘えようかなと思っていた時。そういえば姉は興味がある異性がいるのかと、ふと気になった。

もちろん姉に彼氏がないことは知っているが、誰か好きな異性がいるかもしれない。

そう思うと顔の見えない架空の姉の片思い相手に嫉妬心が沸き上がってきて、居ても立ってもいられず直ぐに姉の部屋へ突撃した。

そこであたしの考えは杞憂だということが即判明し、いつも通り何をやるわけでもなく姉に甘える休日を満喫した。

そしてその日の夜、姉に好きな異性がないのはおかしいことじゃない、と言われたあたしはネットで『異性 好きじゃない おかしい』みたいなことを適当に検索して出てきたネット記事を読んでいた。そこには自分の悩みと同じような悩みを持った人がそれなりにいて、思ったより世界には色んな人がいるのだと思った。いくつか記事を読んでいると、関連にあった同性愛の記事が目に入った。

そういえば好きな異性がないかは考えたことがあったけど、好きな同性がないかは考えたことがなかったことに気付いたあたしは、興味本位でその記事を閲覧してしまう。

そこには同性愛の世間からの風当たりの強さ、普通ではないこと、それでも負けないでほしいみたいなのが書いてあった。

正直言つて、その時は他人事の気分だった。

異性愛者は周りにたくさんいたが、同性愛者は見たことがなかったから画面の向こう側、違う世界の住人だった。

違う世界の住人といえば、自分はなんだろうと考えたのがまずかった。

——あたしにとって1番好きな同性は誰？ そんなの姉に決まっている。

——じゃあ姉と付き合える？ 普通じゃない。でも付き合うのは嫌じゃない。

——女同士で付き合うのが普通だったら付き合えるの？ 間違いない。

——手を繋ぐことも、デートするのもできる？ 普通の姉妹でもできる。

——キスや性行為は？ ……想像できない。けど、嫌じゃない。

——姉があたし以外と……
——そこまで考えて、思考を打ち切った。もう自分の中で結論は出ていたから。

「そっか……あたし、普通じゃなかったんだ……」

そして、その日からあたしは姉を名前で呼び始めた。

「はーい、みんなー！　こんばんはやてー！　メモリーズ4期生の早川はやてだよー！」

『こんばんはやてー』『こんはや』『こんはやー』『鼓膜の替え用意してきたゾ』『俺は忘れたけどもう何も聞こえないから問題なかった』

「今日は4回目の「はやラジー！」。早速だけど今回のゲストの方、自己紹介をどうぞー！」

「どもー皆さん、メモリーズ2期生の茜坂マリです。今日はよろしくお願いしまーす」

『どもー』『どもです』『相変わらずのローテンション』『はやちゃんとの温度差で風邪ひくわ！』『マリちゃん、昨日鳩ではやちゃんに負けないテンションで行くって呟いてただけど』『確かにプラスとマイナスに振り切れてるからプラマイゼロだし負けてないな』『謎理論助かる』

思い出したくもない高校生活を終えると同時に、あたしはこのヴァーチャル世界に足を踏み入れた。

アヤカがいない高校生活なんて何も記憶にない。

ただアヤカを心配させない為に通い、アヤカとの話題の為に友達を作り、アヤカに褒めてもらう為に優秀な生徒であり続けた。

あたしが高校生活3年目になった時、アヤカは高校を卒業して家の

中で時間を浪費してた。

あたしとしては、安全な家の中から出てまた傷ついて帰ってくるなんてもう御免なので、このことに問題なんてなかった。どうせ来年にはあたしも卒業だし、アヤカは反対するだろうが高卒で働くことに不満もない。

そう思っていた時に、あたしは『Virtual Youtube』に出会った。

「いや、今日はけっこうテンション高いつもりなんだけど？ ほら、いえーい」

「いえーい！」

「私けっこう【はやラジ！】好きだから、楽しみにしてたよー。第1回だけはアーカイブだったけど、2回目からはリアルタイムで見てるし」

「えっ、本当ですか!？」

「ほんとほんと。3回全部見たけど、やっぱり1回目のユキとの回が好きかな」

『俺も初回すこ』『第1回にして伝説の回』『はやちゃんが9割しやべってた記憶』『限界はやちゃんすこだった』『灰猫ユキとそのオタクの配信だった』『憧れて業界に入ってきたんだし、そりゃコラボできたら限界になっちゃうよね』

最初はアヤカがハマっているらしいくらいの認識だった。

アヤカがそれになりたいと言ったことで本格的に興味がわいた。

そして私は、【灰猫ユキ】のファンになった。

「は、恥ずかしい……じゃ、じゃあ視聴者の皆さんからあたし達宛に届いたマシマロを消化していきますねー！」

「はーい」

「えー、あたしとマリ先輩の共通点と言われるとまずはJKというのが思い浮かぶと思いますが、実は初コラボ配信がユキちゃんなんですよ。そこで、あたしたちがユキちゃんの初コラボした時の感想が聞きたいです」

『話題逸らしたな』『話題逸らした(逸れたとは言っていない)』『実は初コラボがユキちゃん同士(周知の事実)』『な、なんだってー』『メモリーズのユキちゃん好きライブー2トップ』『この2人がコラボする時点で話題がユキちゃんになるのは知ってた』

高校で離ればなれになってしまったアヤカとまた一緒に居たくて。ファンになった灰猫ユキと一緒に遊びたくて。

あたしは「早川はやて」になった。

「え、そうなんだ。初めて知った」

「いやいや、マリ先輩はユキちゃんと初コラボ同士だったじゃないですか」

「自分のは知ってたけど。早川ちゃんはユキ以前に誰かとコラボしてるものかと」

「実はあたしもユキちゃんが初めてなんですよ、お揃いですね!」

「んー、初コラボした時の印象って言ってもなー、今とそんなに変わってないよ? 最初から子猫みたいで可愛いなって感じ」

『まあ猫だし』『間違ってるな』『ヤンキーマリちゃんが雨の中捨て猫ユキちゃんに傘差してるファンアートすこ』『マリユキコラボの時はユキちゃんがマリちゃんにちよつと甘えてる気がする、悪い意味じゃなくてね』『姉妹とか友達ってより飼い猫と飼い主って考えると確かに』

初めて「はやて」として「ユキちゃん」と配信した時は、ただ純粹に嬉しかった。

また一緒だね、もう離れないよと。

それが別の感情に変わったのは、ユキちゃんが他の配信者とコラボをしているのを見た時。

他の配信者——茜坂マリのことは、以前からアヤカから聞いていて知っていた。

ユキちゃんの配信は当然全部視聴済みだから2人のコラボも見たことがあったし、事務所の先輩なんだから当たり前に知っていた。

でも、画面の向こうにいる「あたし」以外と一緒にいるユキちゃん、それを見て感情が抑えきれない「あたし」のことは知らなかった。

「……やっぱり、あたしにとっては憧れのお姉ちゃんみたいな人ですかねー！」

「最初はびっくりしたよ、あのユキに懐いてくる可愛い子がいるんだもの。しかもユキも満更でもなさそうだし」

「ユキちゃんってけっこう寂しがり屋ですからねー」

「そうそう。雨の中で段ボール箱に入っても澄まし顔してても、傘差してあげると不安そうな顔して見てくるの。んで、連れて帰ってお風呂入れて乾かしてご飯あげると懐く」

「ここだけ聞くとユキちゃんがちよろしく聞こえるなあ……」

「実際ちよろくない？」

「そのちよろい人に翻弄されているあたしは……?」

『マリちゃん』ユキちゃん』はやちゃん』『ユキちゃんいないところで散々言われてて草』『ユキちゃん、鳩で私はそんなにちよろくないって言ってる草』『実際マリちゃんの人柄もあるでしょ』『マリちゃんはフランスとるの上手いからな、警戒心強い猫相手には強い』

その後、あたしは絶対に超えないと誓っていた一線を越えた。

アヤカに嫌われるから。普通じゃないから。そう思っただけで避けていたのに。

愛しい人との行為は止まらなかった。あたしだけが知っているものが欲しかった。

全部終わった後……あたしは全てを失う覚悟をしたが、現実には現状維持。

まるで何もなかったかのような顔をした姉と翌日出会ったときは、一瞬あたしの頭がついに都合の良い夢を見出したのかと思った。

しかしそんな頼りにならないものより、灰猫ユキの配信履歴とアヤカに残したあたしの跡が、昨日の出来事は現実だということを雄弁に語っていた。

「これ以上はあたしにダメー지가来るだけなので次のマシマロに行きたいと思います……マリ先輩、先日のライブイベントお疲れさまでしたー！ ソロ曲もユキちゃんとのデュエット曲もメモリーズ2期生での合唱曲も、全部最高でした！ 気が早いですが、はやちゃんのライブも楽しみだよー！ ……気が早いどころか、まだイベント告知すらしてないんだけどね！」

「ありがとねー」

「あたしも現地には行けなかったんですけど、ネット中継で見ましたよー！ もう皆さん最高でしたー！」

「あたしもまー、流石に練習頑張ったけどね。たぶん1番ユキが頑張ってたんじゃないかな」

「……そ、そうなんですか？」

「うん、いつつも居残りで練習してた。そんであんまりにも根詰めすぎだから1回止めたら、バレないように隠れてやり始めたんだ。その時は結局、私が首根っこ掴んで連れてきて柚子ちゃんパイセンに叱ってもらったよね」

『草』『柚子ちゃん強い』『1期生の頼れる先輩、流石だあ』『あれで口リじゃなかったらなあ』『は？ ロリだからいいんだろ』『もしもしポ

リスメン?』『ゆずとも失格』『柚子ちゃんに叱られるの羨ましいんだが』『わかる』『わかる』

ユキちゃんがあたし以外とコラボをする度に、あたしは行為を繰り返した。

何も言われないのを良いことに、欲望をぶつけた。

あちらとこちらの言い分は違うからいつも言い争いになるし、あたしがいつも言葉に詰まって強硬手段にでるけど、アヤカも抵抗しないし合意なはず。

終わった後は自己嫌悪したりもしたが、こんなことをされても構わず他の誰かとコラボをするユキちゃんを見ると誘われているのかも思った。

しかし何回も続けるとそれが間違いで、ただ気にされていないこともわかった。

だから、ユキちゃんが誰かとコラボした後はあたしとのコラボを取り付けた。

誰のものか匂いをつけておかないと。取られてからじゃ遅いことは、よくわかったから。

もう、あたし以外が心の中にあることは、よくわかったから。

「そしたらユキつたらしよんぼりしちやつてさ、叱ってる柚子ちゃんパイセンまでオロオロしちやつてんの。もーウケたよね」

「……」

「あ、あんまウケなかった? ごめんね?」

「い、いえ! ただ叱られてるユキちゃんがあまり想像できなくて……」

「あー、ユキは良い子だからね。たぶんあんま怒られたことなかったんじゃないかな。そこから柚子ちゃんパイセンに懐くようになってたし、嬉しかったんだろうなー」

『ゆずユキ?』『裏話助かる』『ユキちゃん鳩でめちやくちや怒ってるんだけど』『わざと配信で言わなかったのに、マリは余計な事言わないで。らしい』『そりゃ無茶して先輩に怒られたことなんて言いたくないわな』『でも柚子ちゃんには叱らりたい……』『柚子ちゃん、ユキちゃんに怒られて嬉しかったのってリプするのはやめてあげて』

アヤカが怒られたことないなんて当たり前だ。

だってアヤカはあたしにとって理想で、憧れで、最強だったんだから。

アヤカが無理や無茶をしたところなんて見たことないし、弱音なんかも聞いたことない。

なんでこの人たちはあたしの知らないアヤカを知ってるの？

なんであたしがしてないことをしているの？

なんであたしがアヤカの初めてじゃないの？

なんであたしが、あたしだけが妹なのに。

あたし以外はアヤカの特別じゃないはずなのに。アヤカの特別はあたし以外いらぬのに。

先輩だからってアヤカを叱っていいと思ってるの？

妹であるあたしですら、したことがないのに？

嬉しいけど、羨ましいけど、妬ましくて、憎い。

悔しい。悔しい。

苦しい。

だからもう、手段は選ばないことにする。

「……はい、そろそろいいお時間になってしまいました！ 気付いたらユキちゃんの話をしてた記憶しかありませんがマリ先輩、今日は1時間ありがとうございました！」

「うん、こつちこそありがとー。ユキトーク楽しかったよ。今度は早川ちゃんの話も、聞かせてほしいな」

「機会があれば、ぜひよろしくお願いしますね！ マリ先輩、何か告知とかありますか？」

「私は特にないでーす」

「じゃあ、あたしからーっだけ……今日は最後までこの人の話題でしたね、近日中に灰猫ユキちゃんとの初オフラインコラボがあります！」

『マ!』『ユキちゃんのオフコラボって初じゃね?』『この前のライブイベ除けば初』『ついにオフラインきちゃー!』『有給取った』『まだ日程公開されてないのに、どうやって有給取ったんですかね……?』『未来予知だゾ、成功率は1割無いけど』『節子、それ未来予知やない。ただの勘や』『今からわかる、これは伝説の配信になる』『はやユキ勢は全員正座して見ます』『当日までに徳を積んでおきます』

「え、びつくり。あたしもユキとオフコラボしたい」

「マリ先輩は初コラボ取ったんですから、初オフコラボは譲ってくださいーい!」

「うーん……まあ、後でちゃんとしてくれるならいいかな」

「さてさて、それでは皆さん。本日お送りしたのはメモリーズ4期生、早川はやとー!」

「茜坂マリでした。おつはやー」

「おつはやー!」

「ねえ、花菜」

「珍しいね、アヤカがあたしの部屋に来るなんて。普通はあたしがそっちに行くんだけど」

「うん、どうしても話したいことがあって」

「へえ……なに？」

「私、オフラインコラボするなんて聞いてないんだけど」

「知ってる。だって言ってるじゃないし」

「勝手に決めたの？」

「もう事務所と、あたしたちのマネージャーには許可取ってあるよ。日程だけ決めたら教えてくれって」

「マネージャーから聞いてないんだけど」

「家族って便利だね。まさか妹が姉の許可を取らずに、こんな頼み事してくるなんて思わないでしょ」

「……私、オフコラボは」

「しない、なんて言わないよね？ この前ライブで1期生と2期生の皆とはリアルで会ってるはずだけど？」

「それとこれとは……」

「別じゃない！」

「何も違わない！ あの友達とできて、あたしとできない理由なんてない！ 否定なんて聞きたくない！ あたしと違って、はやとと違ってできるでしょう!？」

「……」

「はやとと、あの人の違いは!? 先輩と同期か、後輩かの違い？ そんなの関係ない！ いや、あたしにとってはあの人の方が後から割り込んできたんだ！ なんて、なんであたしが先じゃないの!？」

「……」

「そもそも、あたしはライブイベントなんて反対だった！ 共演者とリアルで会わなくちゃいけないなんて、そんなの許せなかった！ ま

た、またアヤカが傷付くくらいなら、そんな……」

「花菜、私……」

「アヤカを傷付ける全てが嫌い！ アヤカに擦り寄ってくる全てが嫌い！ あたし以外でアヤカを喜ばせる全てが嫌い！ こんな事を考えるあたしが、1番嫌い……嫌い！」

「私、はやてとオフコラボするよ」

実の姉に姉妹間の愛情を超えたものを抱いている。

それはきつと最初からで。

自分は最初から普通じゃない。

最愛の相手の幸せを喜べないそんな自分が、あたしは嫌いだ。

「ユキはやオフコラボ」初オフコラボ。内容未定。緊張する【灰猫ユキ／早川はやて】

運命の日。早川はやてと、灰猫ユキのオフラインコラボ当日。

なんでもいいからアヤカの特別が欲しくて、日程やコラボ内容どころか本人の許可すら取らずに計画したこのオフコラボだけど、アヤカが許可してくれたおかげでなんとか配信当日を迎えることができた。

「アヤカ、入るね？」

「うん、どうぞ」

今も昔もアヤカに嫌われることが1番怖い。

そんな事を思っておきながら、今回の件も含めて嫌われてもおかしくないことをアヤカにはしている自覚はある。

でも、ちよつとしたことで自分の中の醜い嫉妬心が恐怖心を遥かに上回って暴走してしまう。

仕方ないとは思えない。

冷静になった直後の、後悔する感覚には慣れる気がしないし忘れることもできない。

「配信準備は万端だからいつでも始められるよ。でもいいの？ 私が配信内容まで全部1人で決めちゃったけど」

「うん、いいよ。あたしはアヤカと一緒に配信出来れば」

「なにそれ」

「アヤカが好きってことだよ」

これでいい。

2人だけの空間なら嫉妬もない。あたしの見せたくもない心を見せなくて済む。

昔から言葉がなくともアヤカはあたしの心なんてお見通しだったけど、言葉のあるなしでは全然違う。

昔と違うのは、あたしからアヤカの考えもわからなくなっていることだけだ。

あたしが普通じゃないと知った、あの日。

あの日を境として、あたしはアヤカの考えが全然わからなくなってしまった。

顔を見れば何を考えているかなんて丸わかりだったのに。

生まれてから20年弱の付き合いだから感情の推測ぐらいは今でもできるけど、そんなのは他人でもできる。

あたしとアヤカは他人じゃないのに。

どうして、あの日を境にアヤカの気持ちがわからなくなったのかわからない。

「はい」

「はいー！」

『はい』『きちちゃー!』『はい!』こんばんはやてー!』『正座して待ってました』『告知から1週間も正座してたニキ凄い』『足の感覚無くなってそう』『悟り開いてそう』『この日の為に有給取ったぞ!』『俺もこの日の為に会社やめてきたやで〜』

「というわけでね、今日ははやてとのコラボ配信です。もう何度目だったかな……10回は越してるはずだけど、いつもと違って今回はオフラインでのコラボだよ」

「ユキちゃんの部屋からお送りしてまーす！ 配信終わった後はお泊りまでしちゃうんだー！」

『テンション上がってきた』『お泊り……いい』『閃きそう』『阻止』『阻止』『健全なコンテンツだからな』『頭中学生大杉』

配信が始まると、いつも通り「早川はやて」のスイッチが入る。

現実のあたしとは違うあたし。

自分の醜い心とは違うあたしになろうと、無駄にテンションの高いあたしになる。

いつもはそれで上手くいくんだけど、今日は隣にアヤカがいるからちよつと調子が狂う。

さつきもお泊りなんて言うつもりはなかったのに、無意識に口から出ていた。

これくらいなら、まだはやてがユキちゃんとのコラボにテンションが上がって発言したと思われるだろうが、自分の事は自分が1番よくわかってる。

あれはただのマウント行為だ。

自分の優位性を敵に見せつけているだけの行為。ただ気持ち良くなるだけの自慰行為と変わりない。姿が変わっても変わらない、浅ましい自分の心が嫌になる。

「実は私、今日けっこう緊張してるんだ」

「えっ、そうなの？ 全然そんな風に見えないんだけど」

「ほんとに。初配信より緊張してるかも」

「そう言われるとあたしまで緊張してくるんだけど……」

『俺も緊張してきた』『お見合いですか？』『ユキちゃん 初配信 緊張 ……？』『配信慣れしてないから手際は良くなかったよな』『緊張してた記憶ないゾ』『ユキちゃんが2期生トップバッターで淡々と配信しちゃったから、2番手のリンゴンの緊張凄かった記憶しかない』

『林檎ちゃん噛み噛みだったなあ、懐かしい』

「まあ一番緊張したのは、ライブイベントで初めて1期生2期生の皆と顔合わせする時だったんだけどね。今日は2番目かな?」

「……ユキちゃん、そろそろ今日何するか発表お願いしていい?」

「あ、うん。じゃあ改めて、今日は私たちのコラボ配信に来てくれてありがとう。配信が始まる前から鳩でハツシユタグ#ユキはやオフコラボ で呟いてくれたのも見たよ」

「今日のサムネ画像も鳩で呟いてくれたものなんだよね! 他にもたくさんのイラストありがとう!」

「他のも良かったけど、このイラストが1番良かったからサムネで使わせてもらったよ……せつかくのオフコラボだし、このイラストと同じポーズしてみよっか?」

「へっ?」

『え?』『ふあっ!?』『あっ……』『ありがとうございます!』『本日初めてええ頂きました』『まだ開始直後なのに昇天してたら命持たないぞ』『命のストック用意してきた』『命ストック兄貴こわすぎ』『2Dだから俺たちに見えないけど、心の目で見るからオツケーです』

アヤカに右手を繋がれて、一瞬何が起きたのかわからなかった。

最近、あたしから触れることはあってもアヤカから触れてくれることなんてほとんど無かったから、不意の接触到心臓が跳ねる。

久しぶりにアヤカから手を握ってくれたとか、今日は2Dだからこんな事したってリスナーには見えないし意味ないとか、ずっと手を握っていたとか頭の中を様々な感情が巡っていく。

その時、繋がれた手の中にふと違和感を覚えた。

何かあたしたちの手の間に異物が挟まっている、比喻ではなく現実にその感覚があった。

これが何か問うためにアヤカの方へ視線を向けると、あたしと繋がれていない自由な右手をPC画面に伸ばしピースサインを作っている。

アヤカからの視線は、あたしもイラスト通りに左でピースサインを作れと言っており、この行為の意味も異物の正体もわからないまま、言う通りに画面へ腕を伸ばした。

2人してイラスト通りのポーズをすると、満足したのかすぐに繋がれた手は離れてしまった。

久しぶりの姉からくれた温もりが離れていくのは寂しかったが、それによって先程の異物の正体が明らかとなる。

ソレは1枚の紙きれで、そこにはアヤカの筆跡でただ一言『ちゃんと、私を見てほしい』とだけ書いてあった。

「はやてが恥ずかしがって中々ピースしてくれなかった」

「えっ、いやだって……恥ずかしくはなかったけど、見えないのにやる意味あるのかなって思ったよ」

「オフラインじゃないとできないことだから、どうしてもやりたかったんだ……嫌だった？」

「嫌、でもないけど……」

「手を繋ぐのも？」

「うん……嬉しかったよ」

「そっか、よかった。じゃあ今日は1日手繋いであげるね」

『は？ てえてえ』『オフラインに感謝』『ありがとう』『ユキはやのおかげで持病の癌が治りました』『俺も持病のニートが治ったゾ。今度初任給で投げ銭するから覚悟の準備をしておいてください』『はやちゃん大丈夫？ 限界化しない？』『ユキちゃんとはやちゃんの手の中に挟まりたい』『百合の間に挟まるのはNG』『お前は紙くずにでもなってる』

アヤカからの謎のメッセージと、帰ってきた右手の温もりであたしの頭の中は配信どころではなかった。

『ちゃんと、私を見てほしいっ？』

あたしはいつでもアヤカを見てきたつもりだ。
いつもアヤカだけを見てきた。

さつきまで話していた友達の顔をすぐに思い出せないことはあっても、アヤカの顔を忘れたことなんてない。

「それで今日の内容なんだけど、私たちってコラボするときは大体ゲーム配信だったからさ、あんまり2人の時に雑談してたことなかったんだよね。というわけで今日はマシマロと鳩のハツシユタグで募集した、質問返しです」

「わりと雑談してた記憶だったけど、あんましてなかったんだ」

「裏でも話すからね、配信には乗ってないだけで」

「あ、そっか」

「そういうこと。……じゃあ1つ目の質問、お2人は姉妹の仲が良いことで有名ですが、リアルでも姉妹や兄弟がいたりしますか？」

『リアルの質問かあ』『ユキちゃんもだけど、意外とはやちゃんもリアルの話題出さないんだよね』『まあヴァーチャル世界だからな、リアルの話はあまり詮索するものじゃない』『でもちよつと気になる質問だな』『妹属性ユキちゃんと姉属性はやちゃんとか、想像するだけでギヤツプ萌え案件』

なんだ、この質問は。

なんでこのタイミングでこの質問を選んだ？

今の、オフライン状態で。手を繋いでいる状態で。私をちゃんと見てほしいというメッセージを伝えた後で。

先程から困惑が収まらない私を横目にアヤカは自由な右手でマウスを操作し、おもむろにスタートメニューからメモ帳を起動した。

そのままサブモニターに表示されているコメント欄に重なるようにドラッグさせ、覆い隠せるまで拡大させる。

『これでコメント欄は見えなくなった。私達2人だけの世界だね』
『花菜は何も操作しなくていいよ。私が好きに書き込むだけ』
『だから、ちゃんと私を見てね。お願い』

「あんまりアルのこと話しても面白くないだろうから話さなかったんだけど、私は妹が1人いるよ。1つ下の」

『世界で1番大切な、最愛の妹が』

「へー、そうなんだ」

「うん。昔はお姉ちゃんお姉ちゃんって可愛かったんだ。今はちよつと生意気に名前呼びしてくるんだけど、それも可愛いのに」

『名前呼びが反抗なんだよね？ お姉ちゃんと妹だけじゃ嫌なんだよね？』

「なに、それ……」

「名前呼びは嫌じゃないんだ。けどそれとは別に、姉離れかなーってことがあって」

『でもね、花菜』

「妹だったら最近、私以上に好きな人ができたらしくて。取られちゃったみたいで寂しかったり」

『あなたの頭の中にいるアヤカと、あなたの姉の高森彩華は別人だよ』

頭が真っ白になった。

何を言っているのかわからない。

何を言われたのかわからない。

あの人は今、なんと言った？

アヤカと彩華が別人？ 意味が分からない。

だってアヤカは今、あたしの目の前にいる。別人なわけがない。

あたしがアヤカの顔を間違えるわけがない。

あたしは間違っていない。

「……それって、ユキちゃんの勘違いなんじゃないの？」

「ううん、本当。これでも私はお姉ちゃんだから、妹の事はよくわかるんだ」

『間違ってるのは花菜、あなた』

「……あたしは！」

『あたしは、間違っていない？』

「……あたしは」

『花菜、こつちを見て』

言われるまま顔を上げると、あたしを見つめるアヤカと目が合った。

相変わらず何を考えているかわからない。

視線だけは交わっていても気持ちが変わっていない、昔なら考えられなかった気持ち悪い感覚。

……視線だけが交わっていても気持ちが変わっていない？

——それはつまり、あたしがアヤカを見ていなかった何よりの証拠で。

いや、違う。あたしは確かにアヤカを見ていた。

ならば間違っていたのは前提。アヤカを見ていて、彩華を見ていなかった。

……なんだ、間違っていたのはあたしだった。

「あたしは……」

『高校で離ればなれになったから私を見なくなったわけじゃないよね。それ以前、名前呼びが始まった時から』

「お姉ちゃんが1人いて……」

『自分の感情を理解して、姉妹でそんな感情を抱くなんておかしいと思っ』

「でも……」

『だから私と同じ名前、同じ姿のアヤカを作った』

「いつからか、気持ちがすれ違っちゃって……」

『同じ名前だけどアヤカと彩華は別人だから、恋人みたいなことをしても問題ないもんね』

「あたし、酷い事たくさんしちゃって……」

『私がユキになったら、花菜がはやてになって追いかけてきた。そして、そこでも自分の知っている私と違う私を見て、理想のユキをつくった』

「ずっと逃げてばかりだったけど……」

『ねえ、花菜。私を見て。あなたの好きな、あなたを好きな私はどこにいるの?』

「話を、してみようかな……」

涙に滲んだ世界で、お姉ちゃんを見つけた。

久しぶりに見たお姉ちゃんは前に見た時より、ずっと愛おしかった。

お姉ちゃんから、あたしに向けられる視線にも愛情を感じて。

あたしは、お姉ちゃんとまた会うことができた。

「あ、もう2時間じゃん！ 楽しい時間が経つのは早いなー！」

「ほんとにね。もっと話したいけれど、終われなくなっちゃうから今日はここまでかな」

『あつという間の2時間だった』『2人の事色々聞けて楽しかったよー！』『ユキちゃんのリアル話とか貴重どころではない』『ていうかユキちゃんがリアルにいるとは思えないわ』『そりゃヴァーチャル世界の住人だからな』『まあ言いたいことはわかる。非現実的っていうか』『はやちゃんは1学年に1人はいそう』『カーストトップのアレね』『陰キヤの敵な』『はやちゃんはオタク君に優しい……はず』『あんなのラノベの世界にしかないぞ』

「それじゃあお疲れ様……ってわけじゃなくて、最後に1つだけ」

「え、なにに？ まだ何か用意してたの？」

「うん。ていうか、個人的には今日のメインイベントなんだよね。これの為に粹取ったみたいなものだし」

「えー！ 何それめっちゃ気になる！」

『俺も気になる』『えっ、今日はまだ配信終わらないのか!』『ああ……しっかり楽しめ』『うめ。うめ。うめ』『ユキちゃんのサプライズ……期待!』『まだまだ正座できます』『正座ニキまだやって草』『PC前

で正座しながらコメント打ってるの想像したら草』『癖になってんだ……正座して視聴するの』

「と言っても、ただの自己満足なんだけどね。だから本当は配信でやることじゃないし、リスナーさん達には退屈かもしれない。ここでブラウザバックしてもらっても大丈夫」

「い、今からあたし何されるの……?」

「実は、はやてに手紙書いてきたんだ。……仲直りの手紙」

『仲直りって、ユキちゃんとはやちゃんケンカしてたの?』『ええ……全然見えなかったんですが、それは』『ケンカしててこれなら、ケンカしてない時は一体どれだけ凄いな』『ケンカはケンカでも、犬も食わないケンカってなーんだ?』『世界最強の親子喧嘩とかですかね……』

「うそ……だって、悪いのは全部あたしなのに……」

「ううん、私にも悪いところはあったよ。実際、ちよつと前までは別に今まで通りでいいかって思ってたし。……じゃあ読むね。はやてへ。あなたにはたくさん伝えたい気持ちがあります——」

「お疲れ、花菜」

「お疲れ、お姉ちゃん」

配信が終わり現実世界に戻ってくると、自然に【早川はやて】のスイッチが切れた。

まあ、今日はちよくちよく切れていた気もするが。主にメモ帳の時とか手紙の時とか。

というか、この姉はいつの間にあんな手紙だったりを準備していたのか。

あたしは姉のことが大好きだし、姉もあたしのことを好きなのはわかっていたが、最近は少し自信がなかった。ただあたしの一人善がりだったのかと思っていた。

本当にそうだったし、あたしが全部悪いので何も言う資格なんてないのだが。

「ていうかお姉ちゃん。ちよつと前までは今まで通りでいいって思ってたなら、何がきっかけだったわけ？ さつきは聞けなかったけどさ」

「ああ、それ？ それはね……花菜に、襲われたときだよ」

「へえ!？」

「だって花菜ってば、私を通して私じゃない私と楽しんでるんだもん。今までは、私も花菜も向きはちよつとズレてるけど同じところを見ていると思っただのに……」

「つ、つまり……」

「アヤカに嫉妬したから、アヤカを消したの。私を騙って花菜とイチヤイチヤしてくれたんだし、消えてもらうしかないよね」

「その、してる時に無反応だったのは……?」

「自分の好きな子が、自分のそっくりさん相手に楽しんでるのを見て楽しむ趣味はないってこと」

本当に恥ずかしい。

理想の姉を妄想しながら、現実の姉の体を使って楽しんでいたと思うと消えてしまいたい。

嫉妬してくれて嬉しいとかより、あたしの中の羞恥心が悲鳴を上げている。

このまま自室に帰ってしまいたい気持ちでいっぱいだが、せつかく

のお泊りチャンスが無駄にすることなんてできないし、それより前に今なお繋がれている手を放すつもりもない。

つまり、あたしはこのまま姉の前で悶えることしかできないのだ。それも悔しいので、せめて顔を見られないように姉の胸の中に顔を埋めることにした。

「わ、っと。ふふっ……花菜ってば甘えちゃって」

「いいでしょ、別に……これくらいは普通だよ。そう、普通なの」

「普通、ねえ……普通ってそんなに大事？」

「そりゃそうでしょ？ 普通じゃないからって、お姉ちゃんの事を迷惑扱いしてきた人たちの事、まだ忘れてないからね」

「そうじゃなくて、女同士とか姉妹でとか。そういう普通」

姉がこの発言を本気で言っているのはわかるが、いかんせん同意はできない。

だってそのことで散々悩んできたのに、はいそうですねとすぐ頷いてしまったら本当に自分が馬鹿みたいだ。

普通であることが当たり前で、普通じゃないことが間違いだということとはよく知っている。

そしてあたし自身も普通じゃない側の人間だが、数の暴力には勝てないから大人しく普通を演じるしかないのだ。

自分と同じ存在しか認めない、認められないと生きていけない。それならば弱いあたしは、普通であろうとすることしかできない。

「別に道行く人全員に、自分は同性愛者ですってカミングアウトするわけでもないしよくない？ 私は花菜が好きで、花菜は私が好き。それだけじゃん」

「そう考えられるお姉ちゃんが羨ましいよ……」

「そこまでして普通でいたいならば、私と普通の姉妹じゃないこと……したくないんだ？」

「それって」

「私より花菜の方が詳しいでしょ？ 私の体を使って、散々してたくせに。……まさかアヤカとはできて、あたしとはできないなんて言わないよね？」

ああ確かに。普通であるとかどうか、あまり関係ないのかもしれない。

今すぐ主張を変えることはできないが、今少しそう思ってしまった。

だって大好きな相手が、自分を誘ってくれているのだ。

好きな相手からの誘いを断る程には最低ではありたくないし、何より好きな相手と触れ合いたいと思う気持ちの何がおかしいのだろうか。

そう思ってしまった時点で、今だけあたしは普通を演じることをやめた。

「花菜へ。」

あなたにはたくさん伝えたい気持ちがあります。

ちよつとしたことから大切なことまで、本当にたくさんです。

私としてはあなたに問題なく伝えられていたと思っていたのですが、全然足りていなかったことを最近になって実感しました。

なので、口があまり上手くない私は手紙という手段を使ってあなたに気持ちを伝えたいと思います。

まずは謝罪を。

花菜の気持ちを全然わかってあげることができなくて、ごめんなさい。

最近の気持ちですれ違っている期間は私にとっても苦痛でした。

言い訳になってしまいますが、私は花菜に甘えていました。

花菜なら何も言わなくてもわかってくれると。今までそうだったから。

でも違った。ちゃんと言葉にしなくちゃ駄目だった。

花菜は私じゃないんだから。

そう思つて言葉にしても、言葉足らずな私は花菜を余計追い込むだけでした。

姉として情けない気持ちでいっぱいです。本当にごめんなさい。

次に怒りを。

花菜は時々、私を通して違う私を見ていましたね？

私には、それがとても悲しかったです。

目の前に私がいるのに無視されるようで、花菜の理想の私を押し付けられているようで。

私にも非があつたけど、これだけは言わせてください。

花菜の理想の私は存在しません。

だから現実の私を好きになってください。

私は私だけだから。高森彩華は世界で1人だけだから。

あなたの目で、きちんと好きな人を見てあげてください。

最後に感謝を。

私の妹になってくれてありがとう。

私を好きになってくれてありがとう。

高森彩華は世界で1人だけど、高森花菜も世界で1人です。
私の大切な妹で、最愛の存在は世界であなた1人だけです。
大好きだよ、花菜」

蛇足

初めての友達

美人と待ち合わせすると楽だと気付いた、とある土曜日の午前11時。

待ち合わせ場所を選んで適当な駅前にある適当な喫茶店に入ると、探すまでもなく窓際でスマホ弄っている女がいた。

店が混み始めるピーク時間より少し早いこともあって、まだ席が埋まり切っていないのもあるが一目で気付けたのも、美人特有の光り輝くオーラが体から出ているからだ。

どこにでもいる黒髪ロングでも美人だと注釈があれば艶めいて見えてくるし、どこにでもある喫茶店でも美人がいるというだけで特別に思えてくる。美人補正ってやつか。

同じ女として生まれてきてもちよつと顔が良い止まりの私と、学年一どころか学校一レベルの彼女とでは比べるのもおこがましすぎる。

これで性格が傲慢だったりするのがお決まりの欠点なのだがそれでもない。まあ違った意味で性格に難はあるが。

「やほー。おまたせー」

「やつほ。時間ぴったりだね」

「ユキは早いねー。真面目ちゃんだ」

「そんなことないよ。5分前に着いてないと落ち着かないだけ」

「そこが真面目ってこと」

夏と秋のちょうど間の季節、まだ少し……どころかだいぶ暑い日もあるが、対面に座る黒髪の女はその髪と同じ色の服を上下で揃えていた。しかも腕も脚も出さないスタイルで。

今日はそこまで暑くなかったうえに正午前というのもあって涼し

かったが、どうせそのうち暑くなるだろうしと面倒さを誤魔化す為の言い訳をしつつ、半袖のTシャツにシヨートパンツを穿いてきた私が馬鹿みたいだ。

いや、本当は私が正しいはずなのだがモブ……サブヒロインくらいにしておこう。サブヒロインとメインヒロインではメインヒロインが正義なのだ。ここでも顔が良い女が勝つ運命ってわけ。

「まだ注文してないけど、マリ……あつ、こつちでもマリでいい？」

「いや、私もユキって呼ばせてもらうし。ネットの友達と会うなんてほとんど経験ないけど、お互いリアルっぽいで助かったね」

「そうだね。日本人顔してるのに外国の名前で呼ばれるのも違和感だろうし、それっぽくてよかった。でもそこまで他人の会話なんて聞かないか」

「んー、まあ普通はそうだけど。ユキはちよつと気を付けた方がいいかもね」

「そう？ マリが言うならそうなのかも、気を付けておくれ。……で、注文どうする？」

「私はアイスコーヒーだけでいいや」

「じゃあ、私もそれで」

注文の為に店員を呼ぶと、私が1人で来た時よりも気持ち早くオーダーを取りに来たように感じる。

まだそこまで客がいらないとはいえ、それなりにはいるから決して暇ではないはず。

アイスコーヒー2つとだけ注文、かしこまりましたと返されてからキッチンに戻り商品を運んでくるまで1分もなかったことを考えると、案外暇だったのかもしれないが。

2人してコーヒーで乾杯を済ませると、軽く1度口を付けた。

待ち合わせの場所で喫茶店が1番都合が良くて、その喫茶店で待ち

合わせをしたから形式上注文しただけ。喉が渴いているわけでもない
のでこれだけで十分。

相手も同じように一口しか飲んでいないし、早速本題の方に入りそ
うだ。

「はやてとの事、色々相談に乗ってくれてありがとうね。助かった
よ」

「いいってことよー。友達の頼みだからね」

「無事に仲直り？ みたいなのもできたし。マリのおかげ」

「いやいや、私なんて全然大したことしてないし。全部ユキと早川
ちゃんが自分たちで解決しただけっしょ」

「そんなことないよ。一人で抱え込まないで、誰かに話すだけでも楽
になれた。絶対にマリのおかげ」

「いやいやいや……っていうと無限に続いちやうから、ありがたく受
け取っておくわー。にしてもリアルで会ってお礼言いたいとか、ほん
とに真面目ちゃんなんだから」

「だから、そういうわけじゃないんだけどなあ。ただ今回の件で、実際
に会って目を見て話すことの大切さを知れただけだよ」

「なるほどねー。……まあ実はリアルでそんな遠くに住んでなかった
わけだし、別にいいけど」

私の住む町とユキの住む町が隣同士らしいというのは、ユキがリア
ルで会って礼を言いたいと申し出てきてすぐに発覚した。

別に多少距離があっても会うのに問題はない。ただの気分的な話
だ。

隣同士らしいので、待ち合わせはユキの町の方にある駅前にしても
良かった。

ユキは遠慮していたが押し切った。町の1つくらいで移動時間も
何もない。

そんな事よりも、私にとっては早川ちゃんとユキがリアルで姉妹だった事の方が驚いた。

前から2人の仲の良さは有名だったけど、リアルで姉妹だったら納得するところもある。

早川ちゃんがユキに憧れてこの世界に入ってきたのも、姉と一緒に遊びたかったからだと聞いた時には心が温まった。その後に私に嫉妬してユキと口論になったことを聞かなければだが。

「早川ちゃんとのオフコラボも、結果的にあんま批判無くてよかったね。配信者同士がケンカしてた話なんて良い火種かと思ったら、案外燃えなくてびっくり」

「いかにも燃えて欲しかったみたいに関こえるんだけど？」

「それは失礼しましたー。でも私達のリスナーなんてちょーつとしたことでもすぐ杞憂するからさ。今回の事なんてカモ葱案件じゃねえ」

「まあ否定はしないけどさ。コメントでもいくら言われたし。……でも、それ以上に柚子からは散々叱られたよ」

「ぶっ……柚子ちゃんパイセンは相変わらずだなあ。ユキもユキで、素直に聞いてくれるから叱りがいがあるんだろうねえ」

「私の事を叱ってくれる人なんて今までいなかったから新鮮なんだ。両親は良い人達んだけど不干渉気味だったし、妹はアレコレ言うってくるけどただ甘えてるだけだってわかるし」

「何それ、惚気？ ウケるんだけど」

本人にその気は無さそうだけど、ちよつとからかうくらい許してほしい。

早川ちゃんとオフコラボを行う事が決まってから1週間の間、毎日相談を受けていた報酬みたいなものだ。

さつき礼なんて要らないとは言ったけれど、それは感謝の言葉の事

であって貰える報酬は貰っておく。

変に遠慮する関係なんてお互いに『らしく』ないし。

まだ顔を合わせて1年の関係だけど、どちらも遠慮するのもされるのも好きじゃないことくらいわかってる。

だからこれでいいんだ。気の許せる友達、だからね。

「ていうか、なんで私に相談したわけ？　相談するならもつと良い人
いたでしょ。それこそ柚子ちゃんパイセンとか」

「それは……マリがヴァーチャル世界で、いや、私が生まれて初めて自
分から作れた友達だから」

「……へえ」

「つまらない話になっちゃうけどさ。私って小さい頃から相手の顔を見れば、今どんな感情なのかわかったんだ。気付いたらどういいう時に
どういう感情を人が持つか理解できて、何も面白みのない人生になっ
てた」

「……」

「中学まで上辺だけでも友達なんて存在とは無縁で、家族だけが理解
者……ううん、結局私の理解者は妹だけだったかな。そんな時に高校
に入学して、初めての友達ができた」

「その友達に相談しなかったのはなんで？」

「もう友達じゃないから。昨日まで友好的だった彼女は、ちよつとし
た事で私を憎むようになったよ。……まあ、そんな事はどうでもいい
んだけど。それで、リアルの間人間関係は失敗したけど相手の顔が直接
見えないヴァーチャル世界でなら、もしかしたら上手くいくんじゃない
いかってV t u b e r に応募したんだ」

「……そうだったんだ」

「結果合格してデビューして、初めて他のライバーとコラボできるよ
うになって……ついに複数人でのオフラインコラボまで成功できた」

「オンラインとはいえコラボも慣れてきたけど、初めてのオフライン

で10人近くと会う事になるって考えると凄く緊張した。また失敗したらって思うと、何度も断ろうと思った」

「でも、ユキは来たね」

「うん。このチャンス逃したら一生後悔すると思ったし、私にとってV t u b e rは希望だったから。……そして初めて皆とリアルで会って、びっくりした。皆私に優しくしてくれて、配信と同じ調子で面白くて、その時のイベントに真剣に取り組んだ。あのマリでさえ」

「ちよつとー、それどういう意味ですかー?」

「それくらい意外だったってこと。マリってこういうイベント事、面倒臭そうだと思ってたけど……口では面倒臭がりながらも、目は真剣だった。だから私も……私が一番頑張らないと、って必死に練習した」

「結局、柚子ちゃんパイセンに大目玉くらってたけどねえ」

「あれはマリが柚子の前に連行してくからでしょ……」

「……まあそんなわけで、マリが私の初めての友達なんだよ。灰猫ユキの初めてのコラボ相手さん」

「いやあ、なるほど。とりあえずユキが私に感謝してるのはよくわかったよ」

「うん、それだけわかって貰えればオツケー。……で、申し訳ないんだけど今日はこれで解散ってことをお願いしてもいい? マリと会ってくるって言ったら、この後妹と出かけなくちゃいけなくなっちゃって」

「あーうん、おけおけ。早く行って妹ちゃんの機嫌取ってあげて。私刺されるのは嫌だからね」

「うちの妹はそんなことしないんだけど? 変なキャラ付けしないでよ」

「ごめんごめん、冗談だつてばさあ。……あ、そうだ。今度は私ともオフレココラボしようね」

「……うん、もちろん」

ユキと一緒に喫茶店を後にした。

会計の時にユキが奢ってくれそうになったが、割り勘にまで持ち込んだ。

ユキはお金出さないと気が済まないだろうけど、私は割り勘以上じゃないと引く気ないよと言って納得させた。たかだかアイスコーヒー2杯で割り勘か奢りか揉めるのなんて馬鹿らしいってのは言わないでほしい。

しかしユキからあそこまで感謝されるとは思わなかった。

本当に自分では大した事をやったつもりなんてないし、初めての友達だなんて大げさだ。

でも彼女から感謝されて嬉しい気持ちもある。

自分の罪が軽くなったようで。

「私はただ見ていることしかできなかったのに、ね……」

私にとって忘れられない高校3年間。

クラス中の誰よりも輝いていた彼女は、クラスで誰よりも暗い場所にいた。

クラスを中心気取りの勘違い女主導によるつまらない虐めは、私たちが卒業するまで続いてしまった。

虐めといっても暴力やカツアゲなんてことは一切なく、彼女に対する噂が流れたり無視されたり程度のもので。私達が通っていた高校はお嬢様校とまではいかなくても、そこそこ良いところだったから虐めもお上品だったのかもしれない。

まあ虐めにお上品も何もないし、前提としてあんなつまらない女が主導している以上はつまらない虐めであることは明白だろう。

クラスである女と媚びを売っていた金魚のフン以外の誰もが、彼女

に対する扱いに胸を痛めていたと思う。

私も見て見ぬふりをしていたズルい人間だったから、同じ顔をしている人間の事くらいわかる。そして本心からいじめてやろうと思ってる奴の顔もわかる。

誰も触れられなかった高嶺の花と、高嶺の花に敵わないと知って土足で踏み荒らしていった卑怯者、それをただ見ているだけで何もしなかった臆病者で過ごした3年間は私の一生忘れられない地獄だろう。

唯一の救いといえば3年間彼女と同じクラスになれた事くらいだろうか。

ただそれは自分の罪と3年間向き合うという、救い以上の苦痛を与える拷問付きだったが。

こんなことなら入学したてのあの時に、あの女より早く声をかければよかった。

彼女の輝きに魅せられていたせいで一歩遅れたのが悔しい。

……でも、こうして再び彼女と出会うことができて。

姿は違っても友達になれて。

前と同じ姿でも友達になれたのは、彼女には悪いが不幸中の幸いかも。

「……はあ。暗い考えやーめた」

彼女が気にしていないと言った以上、私にとってもそれで話を終わらせるべきだ。

だって、その方が私達『らしい』から。

そこで暗い思考を打ち切るため私はポケットの中に携帯していた

スマホに手を伸ばし、電話帳からちようどいい気分転換の相手に電話をかけた。

時間的には12時を少し回ったほど。

1コール、2コールと続くが、たぶん今はタイミング的に悪くないし出てくれるはず……そう考えた瞬間に、コール音が止み電話が繋がる。

「あ、もしもーし。私です、私。今お時間いいですかー？」

『そういうの間に合ってるんで。じゃあ』

「あーちよつと待って！ 冗談じゃないですかあ、まったくー」

『面白くない冗談は嫌いな。知ってるでしょ？』

「知ってますよお。……相変わらず可愛い後輩にも厳しい先輩だったことも」

『少なくとも、今話してるのは生意気な後輩だから違うわね。私、生意気な後輩には遠慮しないことにしてるの』

「それじゃあメモリーズには生意気な後輩ばかりってことですか、柚子ちゃんパイセン？」

『そんなわけ。生意気だと思ってるのなんてあんたくらいよ』

そう言って電話の相手である、一ノ瀬柚子先輩は鼻を鳴らした。

「そんな……酷い……。私は傷つきました。お詫びに今日遊んでください」

『はあ!? あのねえ、あんたみたいな人生の夏休みの大学生とは違って、私は社会人なんだから土曜日だろうと普通に仕事なわけ！ その辺わかって言ってる?』

「はい、もちろん。とりあえずどこで待ち合わせします?」

『目の前に居たら引つ叩いてやるのに……!』

「それは遠回しに遊んでくれると」

『言つてないわ！ ……はあ。今日、ユキとリアルで会ってきたんでしょ？ どうだったのよ』

「……」

『駄目だったって即答しない辺り、まあ特にやらかしたわけじゃなさそうだけど。あんたネガティブだから、まあた自己嫌悪してたんでしょ。そんで私に泣きついてきたと』

……本当に、この先輩には私の事なんかお見通しだ。

別に私に限らず周りを見ているから、ある程度は誰でもお見通しなんだろうけど。そこが厳しく口喧しい彼女の慕われる所以であるのは、誰もが理解していた。

今回も事前に今日の予定を報告していたのもあるが、電話して直ぐにバレてしまう辺り流石としか言えない。

私もそこまでわかりやすくはないはずだし、そういう風に立ち回っているけど。それでも先輩にはいつもお見通しで、それが少し嬉しい。

『初めて会った時と比べると、溜め込まないで外に吐き出すようになったのは良い事なんだろうけど。その吐き出し方が面倒くさいというか生意気というか……育て方間違えたかしら』

「私が面倒くさいのは先輩にだけですよ」

『ありがとう、嬉しいわ』

「……全然心がこもってない」

『全然心に響かない口説き文句には、ちょうどいいでしょう？』

私と先輩が初めて会ったのは、あの地獄の3年間を終えて大学に入学した後。

映画の世界から出てきたゾンビのように生気の無い顔をして歩いていたら、当時4年生の先輩とぶつかったのがきっかけ。

原因は当然私の前方不注意だし、当然の如く私が謝ったのだが……なぜか叱られた。

辛気臭いとか、背筋伸ばせとか、顔を上げろとか。

あの3年間で擦り切れていた当時の私は、今思い返すと自分でも酷い状態だと思う。

そこで出会ってしまった先輩は私がぶつかった事にでもなく、私の生き方について叱ってきた。

言葉は厳しかったけど、その裏に隠れている気持ちはとても温かいもので……久しぶりに人の温かさを知った私が、先輩に懐くのは一瞬だった。

1年生と4年生で学年が分かれていたりで時間が合う事はあまりなかったけど、数少ない一緒にいられる時間は無駄にしないようにしてた。

そんな時に、先輩がV t u b e rというものになって活動していることを知って。

この人は卒業前の大事な時期に一体何をやっているんだと思って1度視聴してみると、私は一ノ瀬柚子のファンになっていた。

その後、ライター募集の知らせを見た私が裏でこっそり応募。

ヴァーチャルの世界でも先輩の後輩になったと報告した時は先輩に酷く驚かれたが、まさかその後高校時代に苦い思い出を残した彼女と再会することになるとは夢にも思っていなかった。

「……ユキには、お礼を言われました。妹との事を相談に乗ってくれてありがとうって」

『よかったじゃない』

「私なんて、何もしてないのに……」

『貰えるものは貰っておきなさい。礼なんて貰って損するわけでもないでしょっっっ』

「それと、高校時代の話を私に話してくれました……あの頃の話はあまり覚えてないというか、気にしていないみたいでした」

『それこそよかったじゃない。もうあなたが気に病む理由もなくて』

「私は、何もできなかったのに……今も昔も変わってない……」

『それは違う。昔と今で変わったことは確実にある。それがユキはわかってるから、あなたは礼を言われたのよ』

「……何が、変わったんですか」

『茜坂マリという友達ができただけのこと。友達ができただけから、1人で悩まずに相談することができた。高校の頃のユキは1人で、誰も手を差し伸べなかった。けれど今はマリがいた。……1人で悩まず、誰かがいることの心強さをあなたは知っているはずよ、ひまり』

なんでここまで温かい言葉をかけることができるのだろう。

私はいつも、この人に助けられてばかりだ。

少しは強くなれたと思ったけど、それは勘違いだったみたい。

ちよつと優しい言葉をかけられるとすぐ泣きそうな自分がいる。

でも、強くはなれなくても……彼女の役には立てたらしい。

……これで少しは赦されたかな、なんてね。

「……やっぱり会いたいです、柚希先輩」

『だから、今は昼休憩だけど私は仕事があるの』

「……ダメ、ですか」

『………今日の夜20時に事務所集合』

「え？」

『事務所でゲームでもするわよ。……ああ、ついでだし配信しましよるか。ひまり、あんたが告知しなさい。突発だけど、あんたがやりたかって言ったんだから』

「いや、私別に配信がしたいとは言っていないんですけど……」

『あらそう。じゃあ残念だけど今夜の話はなかったことで』

「やっぱやりたいです！ 配信！ 告知もさせていただきます！」

『よろしい。それじゃあ、私ご飯まだだから切るわよ』

「はい。……いつもありがとうございます」

『いっつもそれぐらい素直だったら可愛い後輩なんだけどねえ……』

一ノ瀬柚子のお悩み相談室

会話に参加または作成する

紅 林檎 ●

検索

@ ?

アクティブ

フレンド

ダイレクトメッセージ

紅 林檎 ●

一ノ瀬柚子

♪?

#XXXXXXXX

0:02

紅 林檎

せんぱーい!

0:02

紅 林檎

柚子ちゃんせんぱーい!!

0:02 紅 林檎 後輩に優しくて頼りになる一ノ瀬柚子ちゃんせんぱーい!

一紅 林檎へメッセージを送信

「柚子ちゃん先輩ー！ 私はもうダメなんですうー！」

「私の配信が終了して3分もしないうちに面倒くさいチャットを送ってきて、返事したら有無を言わず通話を繋いだ奴から『私はダメ人間だ』と言われても同意しかできないわよ？」

「ダメ人間なんて言ってますん！ もうダメって言っただんです！」

「そんなに変わらないでしょう。違うとすれば『もう』ダメか、『やつと』ダメになったかくらいよ」

「なんか今日の柚子ちゃん先輩、当たり強くないですか!？」

「今日の配信終わったし明日の準備して寝ようと思ってたところに来た、招かれざる客に対する態度としては完璧なはずだけど？」

「相談する相手間違えた！」

今更気付いたのか、この後輩は……と呆れる。

大学を卒業してそのまま就職した私は今日も社会に貢献してきたし、明日も貢献する予定。休みなんて基本的に週末か夏と冬の長期休暇しかないから当たり前だ。今週は始まったばかりだし、この前夏が終わわり今は初秋といったところで冬にもまだ早い。

明日の出勤時に必要な諸々の準備をして25時くらいには寝られるかな、と思っていた矢先の予定外のイベント。私が社会人で深夜にはほぼ連絡付かないことを知っているはずなのに押し付けてきたこの後輩には、今日はこのくらいの態度でちょうどいい。

まあどこかの馬鹿後輩茜坂マリとは違って、この子——くれない紅林檎はわざと今日みたいな事をしているわけじゃないから怒ったりしない(違う意味で馬鹿だとは思ってるけど)。

あつちは分かった上で面倒な態度で接してくるし、何かあっても私が断らない(断る理由がない、とも言う)ラインで攻めてくるのが生意気だ。そして肝心な時に頼らないと来た。隠し事が下手くそなく

せに、私に隠れてコソコソするなつての。

「それで、何？ 悩み事？」

「えっ……聞いてくれるんですか？」

「私の睡眠時間を削ってでも聞いて欲しい話があるんでしょう？ 気になるから話してみなさい」

「いやいやいや！ そんなそんな、柚子ちゃん先輩さんの睡眠時間を削る程の話じゃないので……やっぱり無しになつたり？」

「なるわけないでしょう？ 早く話してくれないと気になつてこの後寝れなくなっちゃうわ。オールで出勤するしかないわね……」

「タチが悪い！ 押しかけた分際で言うのもなんだけど、めっちゃくちゃ悪いですね柚子ちゃん先輩！ 言い辛いつたらありやしないですよー！」

「本当にどの口で言つてるの。まあこれくらいで許してあげる……いい加減に用件を聞きたいんだけど？」

「あつ、はい。えつとですね……最近、メモリーズ内で恐竜のゲームが大流行中じゃないですか」

恐竜のゲーム。

そこら辺に恐竜やら絶滅したはずの生物が生息している広大な世界が舞台のゲームで、そこにプレイヤーはその身一つで投げ出されるところからスタートする。

一応のボスやエンディングはあるが、まず最初は衣食住を確保することから始まり、何故か古代にはない（現代でも見ない）アイテムを生成、駆使して生活していくことを目的としてプレイヤーは進めていくことになる。

アイテムの中には謎の技術により恐竜を捕まえることができるアイテムもあるという如何にも男の子が好きそうなゲームが何故、女所帯のメモリーズで大流行しているかというところ、ゲームの終わりどころ

がない事とコラボのしやすさにある。特にこのコラボのしやすさというのが大きくて1人が2人、2人が4人といった形で爆発的に流行していった。

「確かに今のメモリーズは、どの時間帯でも誰かしらが恐竜と戯れているわね」

「そうなんです！ このままじゃ……このままじゃダメなんです！」
「なんでよ？」

「だって、だって……寂しいんです！ 皆、通話に誘っても恐竜が忙しそうだし……私達の1年が、出会ってちよつとの恐竜に負けるなんて納得いきませんよ！」

「はあ」

「それに私のマシマロとか鳩のリプライにも恐竜やらないのかって質問が定期的に来るし！ 私だって好きでやってないわけじゃないんですよ!？」

「あー、確かに林檎も最初に裏でちよつとやってたわね。なんでやめたのよ」

「私のパソコンじゃ裏で遊ぶのが精一杯でした！ 配信なんてまず無理ですし、裏でだけやるのもリスナーに悪い気がして……あと単純にゲームが合いません！ 無駄にリアルで！」

「絶対最後が原因でしょ」

確かにあのゲーム、無駄に生き物の描写がリアルだから耐性の無い人間——特に女性には厳しいかもしれない。私は平気だったし、他のメンバーも当たり前のようにプレイしてたから全然気にしてなかったけど、林檎のようなタイプもいるわけで。

というか裏だけでプレイするのがリスナーに悪いとか、SNSにくる質問に心を痛めるとか、言い方は悪いけど良い子ちゃんすぎる。1年もやってればそういうのに慣れてくるものだと思うけど、変に純情なままここまで来たのか。この娘の同期には特に神経が凶太いのが

いる灰猫ユキから、少しはあつちを見習ったらいいと思う。

まあ見習えと言ったところで、できそうにないから言わないけど。馬鹿なこの娘には難しい相談だ（ここでの馬鹿は、馬鹿正直の馬鹿の事）。

「どうせ今の恐竜ブームも直ぐに収まるわよ、それまでは我慢しなさい。恐竜以外で何を配信すればいいのか分からなかったら、得意な歌枠でも取ればリスナーも喜ぶでしょ?」

「流石に毎日歌枠取られるリスナーの気持ちにもなってください……あと私の喉とか」

「取れるなら取りたいみたいに関こえただけ?」

「配信外でも歌は歌いますからね、結局。私が良くてもリスナーが良いととは限らないって話ですよ。最近、全国の主婦が晩ご飯の献立を悩む気持ちがありました」

「私は毎日好きなものを食べても飽きないけど」

「リスナーが皆、柚子ちゃん先輩だったら私も楽だったのかもしれないね……」

「基本ロムって指示コメか批判コメしか書き込まないけどいい?」

「嫌ですごめんなさい」

「よろしい」

「こうなったらネットで見つけた、絶対にバズる3つの方法を実践するしかない……!」

「ちなみに中身は?」

「売名、炎上、百合営業……です!」

「悪い事は言わないからやめておきなさい。全部あなたには無理よ」

どれ1つ碌なモノがなかった……最後のは比較的マシに見えるけど、この娘は正直1本で生きてきたんだろうし、今更演技なんて無理だろう。

今の3項目を聞いて思い出したが、先月あった某オフコラボは炎上と百合営業を抑えてバズってた気がする。正確に言うと、同じ箱のライバー同士が裏でケンカした話をした割には燃えなかったし、ひまり曰く営業ではなくてガチらしいが。見えないところからすれば営業かどうかなんて同じか。

そもそもあの2人が実の姉妹だという事を知っている人間自体が運営スタッフを除けばユキから直接聞いたひまりと、ひまりから聞いた私しかないはず。この事が外に知れば、それこそバズりの引き金になるかもしれない。もしくは同性の近親による禁断の関係を突っつかれるかもしれないが、そちらは近親云々を抜きにしても今はマイノリティーに関する話は話をややこしくするだけでデメリットの方が多そうだ。

私としては同性だろうがなんだろうが結局は同人同士の話でしょ、で終わってしまうけど。少子化とかまでいくと政治に触れそうだし、この話はここまで。

「……じゃあ、私は寝るから。おやすみ」

「あっ、はい！ おやすみなさい！ 今日はありがとうございました！」

「私は何もしてないんだけど、ありがたく受け取っておくわ。大して時間も取られなかったし」

そのままの流れで通話が切れた。

現在時刻は午前0時30分を少し過ぎたところ……朝の30分ならともかく、寝る前ならそこまで気にする程でもないか。あの良い子ちゃんの事だから、私を気遣って少し話しただけで通話を切ったのかも思ったけど、その割にはスッキリした感じを覚えたし問題ないでしょう。態々追及する話でもないし、私は本当に話を聞いて適当に返したただけだ。

「……さつさと準備して寝ましょ。それがいいわ」



会話に参加または作成する

一ノ瀬柚子 ●

検索

@

?

アクティブ

フレンド

ダイレクトメッセージ

一ノ瀬柚子 ●

茜坂マリ ♪?

#XXXXX

22:37 一ノ瀬柚子 ちょっとツラ貸しなさい



「お呼ばれたので来たんですが、今日はどのようなご用件でしょうか……?」

「何その話し方」

「急に不良から呼び出しをくらったもので。流石にツラ貸せはちよと」

「今度1発ね、今から予約しておくわ」

「相変わらず理不尽な人だなあ」

私からすれば、そっちこそ相変わらず生意気な後輩だとしか言えない。

理解してそうしているのが余計に生意気だ。生意気な態度を取ってくる相手に対して、ついこういう態度を取ってしまうのが私の悪い癖だけど、アレは私から構ってもらうには生意気な態度を取るのが最効率だと1年足らずの付き合いのうちに気付いてしまった。おかげで私の大学生活のラスト半年程度は、常に生意気な後輩を構いながらの生活だった。

自分で言うのもなんだけど、決して良いとは言えない態度で接していたはず。それでも嬉しそうに傍に寄ってくるこの後輩は大丈夫なんだろうか?

たぶん動物で例えたら犬だろう。忠犬じゃなくて駄犬の類。悪い飼い主に引つかかるタイプ。

「昨日の配信終わった後、あんたの同期の馬鹿から相談……相談？
された。メモリーズで恐竜が流行りすぎて寂しいって。あんたら、
ちゃんと構ってあげなさいよ」

「あちゃー、やっぱリンゴン気にしてたのかあ。……ていうか柚子
ちゃんパイセン、配信終わりにリンゴンと話したんですか!?! 通話
!?!」

「それが何か関係あるの？ ていうか、寂しがってるの気付いてたの
ね」

「何それ羨ましい。私も柚子ちゃんパイセンと深夜の個通希望です」

「今してるじゃない、個通」

「深夜じゃないですよ！ 朝まで通話したりとか寝落ち通話とか、そ
ういうの憧れてたんですよ……」

「無理言ってるじゃないわよ。夜帰宅して朝出勤する人間に朝まで通
話とか」

「だから遠慮してたんじゃないですかあ……リンゴンずるい……」

なんか面倒くさいモードに入ったけど無視。構うだけ無駄。

「気付いてたんなら話は早いわね。私が言うまでもないでしょうけ
ど、ちよつとでも気を使ってあげなさい」

「はあーい……」

「あの娘も今すぐやめろとは言ってないし、むしろ配信でやりたいの
にできない自分が悪いみたいなお話してたわね」

「ああー、如何にもリンゴンらしいなあ」

「嫌いじゃないけど配信できない人間の気持ちがわかる？ 好きで恐
竜配信ばかりやってる茜坂マリさんには」

「そもそも私はリンゴンじゃないので、リンゴンの気持ちが全部わか

るなんて言えませーん」

「あんた国語の成績悪そうね。テストで登場人物の気持ちを答えろって問題にいつもバツ付いてたりした？」

「さっきの言葉は柚子ちゃんパイセンの真似して言っただけですよ、私はそれなりに理解しているつもりです。それと自慢じゃないですけど私は国語の成績は良かったですし、文章問題も得意でした」

「それ、遠回しに私の国語の成績が悪かったって言ってる？ 私が悪くなかったし、他人の気持ちなんて適当に書けば大体合ってたから苦労した記憶もないわね。あと、私に彼女の気持ちはさっぱりわからなかった」

「いやあ……好きで恐竜配信やらない一ノ瀬柚子先輩の言う事は違うなあ」

まあ、そうなのだけど。

結局私は好きで恐竜配信をせず、いつも通りの配信をする日々を送っているわけで。そんな私に、好きな配信ができなくて辛いと相談されたところで何も返せるわけもなかった。

本当に、ただ話を聞いていただけで彼女は満足して帰ってしまっただ。私としては大変にありがたい話だった。

私に相談する程だし悩んでいたのは本当なんだろう。だからといって恐竜ブームが起きてから配信してなかったわけでもないし、彼女のあまり引きずらない性格だったりもあっていつも通りの配信で問題ない、と少し背中を押してあげればすぐ立ち直ってしまった。

この役目が私であった必要なんてないし、馬鹿ともいえるその性格が少し羨ましく感じる。自分になりたいとは思わないけど。

「先輩は昔から、最終的に自分の好きな事しかやらない人ですよねえ」
「別に、恐竜は嫌いじゃないけど」

「嫌いじゃないってことは、そこまで好きでもないんでしょう？ そ

ここまで好きじゃないから、それより好きな事をやっていたい。だから配信でもやらないし、裏で少し遊んで終わっただけですよね」

「……ちよつと鳥肌立った。何あんた、私の観察日記でもつけてるわけ？」

「そういう厄介なファンみたいな行為はしてないですよ、ただ一緒に居て気付いただけですって」

「身の危険を感じるから通話切っていい？」

「ちよ、なんもしませんって！ 本当です、本当！ 先輩に失礼な事なんてできませんよ！」

「あんたと話す度に失礼な事されてた気がするんだけど、今日も初っ端からあったわね」

「そんなつもりで言ってないです！ ……だからその、通話切るのだけはやめてもらっていいですかね……」

「そんなに私と話したいわけ……？ それはそれで、ちよつと」

「だって先輩、いつもならこの時間って配信してる時間ですよ？」

「だけど今日はお休みして、私と今通話してるのに……ここで切られちゃったら勿体無いというか。あつ、先輩が何か用事とかあるなら別ですけど……私は久しぶりに先輩と話せて嬉しかったですし。平日は毎日朝から出勤して夜に帰ってきた後、配信やってるの凄いなと思います。休日も平日長時間できない分ってことで、自分が好きなように配信して楽しそうだなって。だから私も、あんまり空いてる時間に話できるか聞くのも迷惑かなって控えてて……でも昨日、配信終わった後にリンゴンと通話したとか羨ましいし、やっぱ勇気出して通話に誘えばよかった……いや、でも」

めんどくさっ！

ちよつと（1ヶ月）話す機会が作れなかっただけでこれとか、めんどくさっ！

ああでも他にもあるか、私が昨日林檎と通話したのもか。

なんで大学時代の私はこんなの拾っちゃったのかなあ……今から

でも返品対応受け付けているだろうか。でも返品するにしても引き取り先がない以上、本人に直接言うしかないのか。となると泣きそうな顔しながらも、わかりましたって言って去っていくのが容易に想像できた。

うん、やつぱ返品なし。寝覚め悪すぎ。

ていうかやつぱこいつ、駄犬では？ その場合、こいつを引っかけた悪い飼い主枠が私になるわけだが……私はどちらかといえば被害者なんですけど。こんなんだって知ってたら拾わなかった、はず。

でも初めて会った時からしてネガティブモード全開だったし、最初から面倒くさいやつだった。つまり拾った私の自己責任かあ……。

それよりまたこいつ、1人で溜め込んで爆発してるし。私に迷惑かけるのが嫌だって言ううくらいなら、いい加減こうして溜め込んで爆発される方が迷惑だって事に気付いてくれ。

「ひまり、あんた土曜の夕方に泊まる準備して事務所に来なさい。そのままどこかで夕飯食べて私のうちに1晩泊まり。日曜は適当に何かして、夕飯食べて解散。何か質問は？」

「……今、柚希先輩のおうちにお泊りって聞こえたんですけど。私の耳がおかしくなったわけではないですよね？」

「ちゃんと聞こえているようで何より。で、質問は？ 事務所集合だから、私の家の住所忘れてても問題ないわよ」

「な、なんで急にお泊りだなんて話が出てきたんでしょうか……？」
「なんでも何も、ひまりが言い出したんですよ。朝まで話したいとかって。それに拾った犬の世話は飼い主の役目だし。それが言う事を聞かない駄犬でもね」

「い、犬扱い……」

「構って貰いたくて態と生意気な態度取ったり、散々何かあったら溜め込まずに頼れって言うてるのに守らない奴にはちようどいいでしょ？ 人間扱いされたかったら直しなさい。あんたが弱つちい人間だってことなんて最初から知ってるんだから、何も強がる必要なん

てないの」

……そう。ひまりが面倒な奴だって事なんか、最初からわかってたんだから。

私が受け身でいたところで改善しないんだったら、こっちからも動くしかない。

それが1人俯いて生きていたひまりを拾い上げた私の責任、でしょう？

【はやラジ！】第6回 ゲスト：一ノ瀬柚子【メモリーズ4期生／早川はやて】

《left》 ▶ ▶ ? ♪ ・ライブ 《left》 ? ? ?
?

? #はやラジ! #早川はやて #一ノ瀬柚子

【はやラジ！】第6回 ゲスト：一ノ瀬柚子【メモリーズ4期生／早川はやて】

《left》 12, 226 人が視聴中・0分前にライブ配信開始
《left》 ☒362 ☒3 ?共有 ≡?保存 …

《left》 早川はやて 《left》 チャンネル登録
チャンネル登録者数 10.9万人

「みんなー! こんにちははやてー! メモリーズ4期生の早川はやてだよー!」

こんにちははやてー!

こんはやー!

珍しい組み合わせだから楽しみにしてたゾ

「今日は『はやラジ!』第6回放送に来てくれてありがとうー! 柚子ちゃん先輩のリスナーさんもたくさん来てくれてるみたいだねー、梓開始前から待機中の人がもういっぱい! 緊張してきたー!」

そんなに緊張しないでもろて

1期生の先輩とのコラボだからね、仕方ないね

4期生と1期生はもつとコラボしてもろて

公式とか大人数コラボではちよくちよくあるけど、個人の少人数でつてなると少ないよねー

「あたし自身、柚子ちゃん先輩とコラボするのはこれが2回目なんだよねー。唯一のコラボも公式の大人数コラボだから、実質これが初めでだし! ……ねえねえ、今日柚子ちゃん先輩と何話せばいいと思う?」

今ここで俺らに聞くのか…… (困惑)

マシマロ募集してたやんけ!

……笑えばいいと思うよ

シンジ君!?

柚子ちゃんミュートしても立ち絵がキレててこわいで、出たー! 一ノ瀬柚子のミュート貫通芸だあー!

「柚子ちゃん先輩のミュート貫通芸! 相手は死ぬ! ……あつ、ごめんなさい。速報です! たった今メモリーズ所属、1期生の一ノ瀬柚子さんから早くしろとの催促メッセージが届きました!」

「早川？」

「ひえっ」

ひえっ

ミユートのはずの柚子ちゃんの声が聞こえた

これもミユート貫通芸ですか？

集団幻聴の可能性も……

一ノ瀬柚子を目の前にしてふざけられる早川はやての胆力

柚子ちゃんを恐怖の代名詞みたいに言わないでもろて

一部の人間からはそう思われてそうなんですすがそれは

一部の人間（メモリーズ2期生）

「えーっと、これ以上は流石に本気で怒られそうなので！ それでは今日のゲストの方、自己紹介をどうぞ！」



『はやラジ！』のゲストに一ノ瀬柚子先輩を招くのは、前々回——茜坂マリ先輩を招いた時から考えていた。

この業界は所謂『セット売り』じゃないが、仲の良い配信者をやらとセットにしたがる風潮がある。別にそれが悪いわけではない。早川^あはや^たてもそれを利用する為に灰猫^姉ユキへ近づいた節もあるし、視聴者も仲の良い配信者たちが見れて嬉しくないはずがないのだから。

今となっては『灰猫ユキの相方は早川はやて』派が主流にまでなってきたわけだが、あたしと灰猫ユキの相方枠を争っていた（あたしが勝手に意識してただけ、つてわけじゃないと思う）茜坂マリ先輩は、最

近だと一ノ瀬柚子先輩が相方枠として見られている。

本格的にはやてがユキちゃんの相方扱いされた理由は勿論あのオフロラボがあつたからこそだと思うけど、ライバルだったマリ先輩が柚子ちゃん先輩とも仲が良く、更には柚子ちゃん先輩が今は相方と呼べる程に親しい相手がいなかったのもある。

1人行動が常の人間が2人以上と行動しているのはどうしても目を引くから、コラボ回数が多かったマリ先輩が相方枠として白羽の矢が立ったのもおかしな話ではなかった。

柚子ちゃん先輩を『はやラジ！』に招くにあたって、あたしはまずマリ先輩から当たってみる事にした。コラボ相手より先に相方に確認を取るのもおかしな話だが、あたしはどうにも一ノ瀬柚子という先輩が苦手なのだ。そも苦手な相手をラジオに招くな、という話は一旦置いておくものとする。

マリ先輩からは肯定的、というより楽観的な返事が来た。変な質問とかしなければ怒られないと思うよ、だなんて当たり前だろう。

他にいくつかした質問も大体が楽観的、どころか適当になつてきたところでチャットは切り上げさせてもらった。柚子ちゃん先輩と1番親しいであろうマリ先輩から彼女の印象を聞いて戦いに備えようと思つてたのに、とんだ期待外れだった。まあ、しないよりはマシだったと思いたい。

話が長くなつたけど柚子ちゃん先輩を『はやラジ！』に呼んだ理由はつまるところ、茜坂マリを呼んだのに一ノ瀬柚子を呼ばないのか、というオタク特有のコンプレックス衝動みたいなものに駆られたからだ。それにほんの少し彼女と話したい欲があつただけ。……それだけ！



「……メモリーズ1期生、一ノ瀬柚子よ。今日はよろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします!」

「ところで私の特技に後輩への説教っていうのがあるんだけど、体験してみる気はない?」

「ええええええ遠慮しておきます」

「そう? けっこう好評なんだけど」

好評（一部の人間）

好評（メモリーズ2期生）

さつきからメモリーズ2期生を問題児集団扱いするのをやめろお!

ただ天然と悪ノリ好きが集まっただけなんだぞ!

柚子ちゃん構ったらちゃんと相手してくれるから悪ガキに懐かれやすいんだよねえ

悪ガキ扱いは草

「お待たせするのも悪いので早速マシマロいきましょ! ……ね? そうしましょ?」

「やっぱリマリとかユキみたいな奴より、林檎とか早川みたいな相手の方が良い反応してくれるわね。うん」

「あーあー聞こえませんか! それでは、1通目のマシマロはこちら!」

こんにちは!

今回は事務所の大先輩である一ノ瀬柚子さんとのコラボ回ですが、お互いの第一印象と今の印象が知りたいです!

マシユマロ

？
”

「第一印象と今の印象ねえ……」

「あたしはさつきコメントでもあったけど、1期生の先輩方とはあんまりコラボした経験もないから印象の変化とかはそこまでないなあ。メモリーズに入る前はなんとなく怖そうだなくって思ってたのだけ変わったけど」

「私も早川たち4期生とはコラボしてなかったから以下同文って感じね。まあ最近少し印象変わったんだけど」

「え？ あたし何か柚子ちゃん先輩にしちやいました？」

俺、また何かしちやいました？

これが今流行りの奴かあ

早川はやてが流行りに乗る……

は？

は？

w

草生える（真顔）

もしかして「早川」と「はやて」と「はやり」をかけてる？

解説ニキやめたげて！

「私は特に何もされてないんだけど、まあ印象が変わる出来事があっただけ」

「……もしかして、ユキちゃん関係だったりします？」

「さあ？ っていうか、あの件についてユキとはちよつとばかりお話したけど早川とはしてなかったわね？」

「へ!? いや、いや、その、ユキちゃんがあたしの分までありがたいお話をしてもらったことで、ここは1つ……ね?」

「別に私は同じ箱のライター同士が裏でケンカしようが不仲だろうが個人の勝手だけど、それを態々配信に乗せて報告する必要があるかって話をしたいわけ。ただでさえこの業界はちよつとした事でも大火事になりかねない程に杞憂民と呼ばれる人種とアンチと呼ばれる人種がいるのに。結果的に燃えなかったからそれでよし、なんて言えるのはそれこそ結果的に燃えなかったからなのよ?」

お怒り柚子ちゃん

はやちゃん目閉じちゃった

うなだれてて草

うなだれはやちゃん

柚子ちゃんは問題児のまとめ役が板についてきたなあ

メモリーズを問題児集団扱いするのはやめろお!

問題児は一部だけ定期

話題ループ定期

「はい、はい……全部柚子ちゃん先輩の言う通りでございます……」

「ちよつと早川、ちゃんと聞いてるわけ? 適当に返事してない?」

「ちゃんと聞いてますって! っていうか、あの時はあたしだって被害者なんですよ! ユキちゃんがあんな手紙用意してるなんて思ってもみなくて……いやもうほんとびっくりしたんですから!」

「確かに、そう考えると早川も被害者と言えなくもないわね……」

「でしょでしょ!? はい、というわけでこの話題はここで終了です! 続いてのマシマロいきまーす!」

はやてちゃん、ゲストの柚子ちゃんこんにちは

柚子ちゃんといえば、今や1期生の中でも全体のまとめ役というポジションですが、

メモリーズ内で1番に手にかかるメンバーといえば誰でしょう？
ぶつちやけた話が聞きたいです！

マシユマロ

？”

「はい！ というわけなんです、柚子ちゃん的にはメモリーズ内で1番に手にかかるメンバーといえば……？」

「まあどつちかよね」

「あら、2択ですか。てつきり1択かと」

マリちゃん以外におる？

まあマリちゃんやろなあ

柚子ちゃんとコラボしてる時のマリちゃんすこふにやふにやしてて好き

茜坂マリと並ぶ一ノ瀬柚子困らせ隊……一体誰なんだ……？

「1人は言わずもがな茜坂マリ先輩だとして、もう1人は一体誰なんでしょうか？」

「あんたの相方」

「……………なるほど」

なるほど？

これはこれは

意外……ってわけでもないような
言われてみれば感

柚子ちゃん的には手がかかるやろなあ
ユキちゃんって意外とポン……

頭は良いけどポンなのよね
むしろそこが良い

「最初は最初で機材の使い方とかよくわかってなさそう、くらいの話
だったけど……ある程度付き合いが長くなってきた、あつちも配信と
かV t u b e r に慣れてくると天然が出てきたのよねえ……」

「でもそこが可愛い！」

わかる

わかる

わかりみ深志（88）

わかりみ深志（125）

「はいはいご馳走様です、惚気は私のいないところでやってください
ね」

「柚子ちゃん先輩キャラぶれてますよ」

「誰のせいよ誰の。ていうか、今更だけどツツコんでいい？」

「はあ。なんでしよう？」

「私、メモリーズのまとめ役になんてなったつもりないんだけど」

え？

？

もしかしてギャグ？

柚子ちゃん以外にメモリーズをまとめられる奴なんていないぜ！

柚子ちゃん……もしかして現実逃避を……！

「いやいや、え？ だってあたしが入ってきた時から、柚子ちゃん先輩が先頭に立って仕切りまくってたじゃないですか？」

「それはしょうがなく……私的にはただ預かってるだけのつもりなんだけど。まとめ役になんて立候補したつもりもないし、押し付けられただけよ」

「あー、えつと、零那先輩……でしたっけ」

「そ。正確には元先輩、かしら。今はもういないし」

零那ちゃん……

元気にしてるかな

そつか、はやちゃん達は面識ないのか

ゼロとは入れ替わりだったもんな

零那……俺寂しいよ

もう1回零那ちゃんの声聞きたいなあ

今でもアーカイブとか切り抜き見ちゃう

元気でいてくれたらそれだけでいいや

「……なんかごめんなさい。私のせいね、変な空気になっちゃった」

「いえ、気にしないでください。ただコメントを見ると、やっぱり大人数だったんだなあ」と

「まあ伊達にメモリーズのセンター飾ってなかったわよ、あいつは。今になってなんとか持ち直したけど、急にメモリーズの顔が辞めるなんて大騒ぎだったんだから」

「あたしが入った時は本当に先輩方、特に柚子ちゃん先輩は大変そうでしたね……」

「もう2度とあんな修羅場はごめんだわ。……公式も、何が『零から一へ』よ！ かつこつけの気取った言葉使っちゃって……思い出したらまた腹立ってきた……！」

「あ、あはは。……これ以上は藪蛇じゃすまなそうなので、次のマシマロいきま〜す」

「こんにちは！」

「今回の『はやラジ！』は柚子ちゃんとのコラボ、今から楽しみです！
はやちゃんと柚子ちゃん、中々に珍しい組み合わせですがもし次にコラボするならどんな事をしたいですか？」

マシユマロ

「？」

「はい！ というわけなんですけど……まず、もしまたコラボを誘ったとして受けてくれますか？」

「内容次第としか言えないわね」

「断られなかっただけよし！ じゃあ折角なので、今考えたコラボ内容で次にコラボしましょう！」

「いやいくら何でも話が急すぎない？」

「まあまあ、善は急げと言いますし。今決めたとしても明日コラボしようなんて言いませんから」

「言われても断るだけだから言いたければ言ってもいいけど？」

はやちゃんと柚子ちゃんってタイプ違うから何がいいのかな

はやちゃんはマリちゃんタイプよね、ゲームメインで

柚子ちゃんは雑談とゲーム半々だからユキちゃんタイプだな

今日ラジオ枠だったし、次はゲーム希望！

「ちよつとコメント欄を参考にしましょうか……今日ラジオ枠だったから、次はゲーム枠が期待されてるわね」

「ゲーム！ いいですね〜！ あたし、柚子ちゃん先輩と輪つか持った運動ゲームしたかったんですよ！」

「いや初耳だしやらないし、そもそもオフラインでやるつもりな一体どこに需要があるのそのコラボは」

「えー!? なんですとか!」

「場所とやる事は違っても毎日椅子に座って作業している人間には拷問以外の何物でもないでしょう、それ」

「だからこそですって！ 大丈夫、最初は痛いかもしれないけど段々と気持ちよくなってきますから！」

※健全な話です

段々気持ちよく……閃いた！

通報

はやちゃんは比較的つよつよだけど、柚子ちゃんは運動のイメージが……

「とにかく。私は絶対に運動系のゲームなんてやらないわよ」

「そんな！ じゃあオフラインで何やればいいんですか!?!」

「いつの間にオフラインは確定になったのかしら」

「逆にオフラインでやらないんですか?」

「ねえ早川、このコラボ始まってから薄々思ってたんだけど、ちよつと馴れ馴れしくなるの早くない?」

「そんな事ないですよ?」

また柚子ちゃんを弄り隊のメンバーが増えてしまった

柚子ちゃんが構つちやうから
年下後輩からやたら好かれる柚子ちゃん
やっぱ人が良いからやるなあ
反応が良いの間違いでは？

「オフラインコラボしましょうよ〜！ オフライン〜！ 今ならなんと灰猫ユキも付いてくるんで〜！」

「あら、それはお得……つてなるわけないでしょ。大体、ユキに許可取ったの？」

「取ってないけどたぶんオツケーです！」

「それはオツケーとは言わないから。それにユキがオフコラボなんて……」

ユキちゃんのオフコラボ計画と聞いて

柚子ユキ派の俺が通りますよつと

え!?! 今はやちゃんとコラボすればユキちゃんも付いてくるのか!?!

これはコラボするしかねえ！ うおおおおおおおおお！

お前どこの誰だよ

百合の間に挟まるとか許されませんよ

俺女だし

はいはいおっさん

「いいわ、やりましょうオフコラボ」

「本当ですか!?! え、ユキちゃんいます?」

「ええ、私は早川はやてオフラインコラボに灰猫ユキのセットを注文するわ。こっちからは一ノ瀬柚子と茜坂マリで行かせてもらうけど」「マリ先輩も!?! ……ちなみに許可の方は?」

「今日明日コラボするわけじゃないんだし取ってるわけないでしょ

う。その辺含めて4人で日程調整してから告知するから、リスナーは首を長くして待っててもらおう事になるわ」

ユキはや＋柚子マリのオフコラボとか俺得すぎる
いつまでも待ちます

ありがとう

神に感謝

※ユキちゃんとマリちゃんにはまだ許可取ってないです
ゲームでも雑談でも楽しみ

「えーつと、そんなわけなんで……この件は後日また改めて報告させていただきますー!」

「どんなに遅くても3ヶ月以内……今年中にはやりたいわね」

「さてさて、では次のマシマロです——」

紅色少女から秘密の便り

私があの人を見つけたきっかけは偶然だったけど、出会った事はきつと必然だったに違いない。

不満だらけの現実に嫌気が差してきたあの時、あの人に出会えた。その為だけに今まで生きてきたのではと思えた。

だから、今は離ればなれになったけど……また、会えると信じて。私は今日も生きていく。あなたが作ったメモリーズの一員として。



日曜日。基本的には休日扱いの日。同じ休日扱いをされる土曜日と比べても、なお休日に該当する人が多いはず。日々社会人として勤労に励んでいる私も、もれなくその一員である。

相手が暇そう、予定が無さそうな時——つまり休日に連絡を取りに来るのはまあ良いとして。ましてや私は、平日は基本的に連絡が遅くなりやすいと事前に伝えてあるから余計だ。

それでも、それにしても日曜の早朝から連絡を寄こすのは非常識だと思わないのだろうか。具体的に言うくと現在時刻は午前5時11分32秒。私は昨夜——正確に言うくと日付が変わっているため今朝——午前3時まで配信をしていて、配信終了直後に鳩で『寝る。おやすみ』といった（ここまで雑ではないが）呟きもしていた。

そして今日は正午から配信予定がある。それまでは惰眠を貪ろうと決めていた私を叩き起こした……つまりこれは、今日の配信を寝不足というハンデを背負わせたまま行わせようとするアンチによる妨害工作なのでは？

寝起きにしては妙に頭が回っている意味不明な理論が展開される

中、下らない用事だったらすぐさま寝直せば問題無いと結論付けて、いざこのクソ非常識な時間に連絡を寄こした馬鹿野郎の名前を確認する。

「くれない、りんご……寝直しましょうか」

つい先日は深夜に押しかけてきたと思ったら、今度は早朝か。なんとというか、やる事が極端な後輩だ……。

「あ、通話来た。……どうしようかしら」

気分的には、いま、物凄く寝たい。

このまま今手に持っているライバー用スマホの電源を落として頭から布団を被ったら、夢の世界へさあ出発といきたい。

でも本当にそれでいいの？ 後輩からの通話を無視できるの？

通話がかかってくる前のチャットでは、『たいへんです！』とだけチャットが来ていた。一体何が大変なんだ。まずは簡潔に用件を書いてくれ。そもそも、それは本当に大変なのか、貴女の勝手な思い込みだったりしないか。

頭の中では二度寝をする為の言い訳探し大会が開催され始めたが、そんな事をすればするだけ頭が冴えてきて二度寝から遠ざかっていく。

何より、ここまで来て連絡を無視した結果、後から本当に大変な出来事だったと聞かされるのが何よりも堪えそうだ。後輩の為なら寝不足がなんだ、私はなんて良い先輩なんだろうか。誰かから褒められたいわけではないけど、急に自画自賛をしたくなった。

「あつ、柚子ちゃん先輩！ 起きてたんですね！ たいへん、たいへんなんですよ!!」

「……おはよう。とりあえず、今が何時か考えて音量を調節しなさい」「す、すみません……。あの、自分でもちよつと落ち着いてなくて、それで、大変なんです、まずは柚子ちゃん先輩に、あの、連絡をしよう、いや、やっぱり言うべきかどうか迷ったんですけど、でも、言わないままにいるのもズルいかなと思って」

「ごめんなさい、全然話が頭に入ってこないから1回深呼吸でもする事をお勧めするわ。その間に私も、頭を起こすために冷蔵庫から水でも持つてくるから」

何やら本当に大変そうだった。ここまで来ても、彼女の事だから『何をそんな事を大げさな』ってオチになるかもしれないけど。

特に広くもないマンションの一室である我が家の、寝室からリビングに設置してある冷蔵庫まで水の入ったペットボトルを取りに行つて帰ってくるまで1分もかからない。それでも、一旦冷静になる為の時間としては十分に足りるだろう。

「どう？ 少しは落ち着いたかしら」

「あ、はい……。改めておはようございます、柚子ちゃん先輩。それこんな時間から申し訳ないです」

「ん。おはよう。時間は、まあそれを忘れるくらいとんでもない事があつたんでしょう？ 落ち着いたのなら話してみなさいな」

「は、はい。実は……。あ、そういえばこの前の『はやラジ!』聞きましたよ。はやてちゃんとユキちゃんとマリちゃんとオフロボするんですか?」

「落ち着いたのはいいけど、話を脱線させないでくれるかしら……。ちなみに、その質問はイエスだけど。日程はまだ調整中ね」

「いいなあユキちゃんとオフコラボ！ 私も1期生と2期生合同のライブイベントの時しかオフで絡んだことないし、羨ましいです！」

「普通に誘ったら？ 別にユキとは仲悪いわけでもないでしょ？」

「いや、その……ユキちゃんとは仲が悪いわけじゃないんだけど、相方が許してくるのかな？ って」

「相方って、早川のこと？」

「です。私とかマリちゃんって、同期って事もあってユキちゃんとは比較的仲良くさせてもらってますけど……だからこそ警戒されてそうっていうか。マリちゃんがゲスト回の『はやラジ！』もなんか時々微妙な空気になってたっていうか」

驚いた。あの、マリをゲストに呼んだ『はやラジ！』の第4回放送の違和感にヒント無しで気付いた……ユキ、早川、マリの関係性を知らずに気付けた事に。

あの時は気付けなかつたけど、今ならわかる。あれは茜坂マリをゲストに招いたラジオなんかではなかつたんだと。ただ1人の女が想い人を取られるかもしれないという醜い嫉妬に駆られて、獲物をアウエーに呼び寄せた私刑の現場中継だ。

私の方が灰猫ユキと親しいんだ、お前より私の方がユキを理解している、急に横入りしてきて何様のつもりだと。

勿論、物事の1部分しか見れないリスナーからすると、あれはただ灰猫ユキの事を好きな2人がただ語り合っているだけに見える。しかし裏面まで見えてしまうと、姉を想い過ぎて狂った女が逃げられなくした獲物を、言葉の刃で少しずつ少しずつ傷付けているさまに早変わり、というわけだ。

勿論、林檎がそこまで気付けたわけではないだろう。だけど違和感を持つ、という事は、実はユキかマリ辺りから相談されて事情を知っていたか、あるいは……

「私はあまりそう思わなかったんだけど、林檎の気のせいじゃない？
もしくは気にしすぎ」
「そう、かもしれませぬね。うん……きつと気にしすぎ。……だけど」
わかつちやうんですよ、私も同じだから。



「……さて。いい加減、本題に入りましょうか」

「ははは……そうですね。では、こほん……柚子ちゃん先輩、驚かない
てくださいいね？」

「……………」

「レーナ先輩、近々帰ってくるらしいです」

その瞬間、私の世界では確実に時間が止まった。いや、なんなら心臓も止まったかもしれない。思考は完全にストップしてたし、スマホは手から滑り落ちた。ベッドで横になりながら通話していたおかげで落ちても床と衝突することはなかったが、その時の私はそんな事なんてどうでもよかった。

レーナ……鳥居 零那が帰ってくる。

その一言を聞いただけで、私は冷静でいる事ができなかった。

頭の中で様々な感情がごちゃ混ぜになる。不快感。私の中で熱が支配したと思ったら急速に冷え、天と地を無限に往復する思考だけでなく、モノクロの視界の中で赤い光と共に零那と駆け抜けた過去がフラッシュバックしてくる。

「……それ、どういう事」

「まだはつきりした時期は決まっていらないですけど、あつちでの用事が終わったからって帰国するらしいです」

「誰から聞いたの」

「うちのマネージャーが少しこぼしまして。私も気になったので尋ねたら、というわけです」

「……そう。社員スタッフは知っていた、それなのに黙っていたのね」「レーナ先輩が秘密にするようになって触れ回ってたらしいです。私は偶然知る機会があつて、当然マネージャーからも口止めされましたけど……他の誰でもない、柚子ちゃん先輩に秘密にする事はできませんでした」

「そう。……そうなのね。わかつたわ、ありがとう林檎。貴女の心遣いに感謝します……本当にありがとう」



林檎との通話を終わると彼女からすぐに、さっきの件は他言無用で、と釘を刺すメッセージが届いた。それに了解の返事を返して私は体をベッドに投げ出した。安物の枕だから顔への衝撃をほとんど吸収してくれる事は無く、少々鼻の頭が痛いけどそんな事はどうでもいい。

先程聞いた話が未だに信じられない。痛む鼻が、これは現実だと伝えてくるけど、あまりに都合がよすぎる話だった。

あの時、掴んでおく事ができなかった相手とまた会えるかもしれない。私にとって、あまりにも都合の良い夢だ

メモリーズ1期生は当初の予定から1名欠員状態の、全4名でデ

レビューすることになった。

理由は簡単に言うとな材不足。

当時プロジェクトの最高責任者であった人物の眼鏡に適ったのが、約3桁の応募から3人しかいなかっただけ。もちろんチームの中では、妥協で穴埋めをして5人揃えようとする意見も上がったものの、最高責任者がそれを認めず3人でデビュー……する直前で何を思ったか、最高責任者が自分を頭数に入れて4人でデビューすると言いつつ出た。

「サンプルは多い方が良い、それだけの話さ。当初5人で計画を進めていたのもそれが理由だ……だったら、私が頭数に入ったところで特に問題はない。むしろ最初からこうすれば良かったと今では思っているよ」

そして彼女は、自らが鳥居零那と名付けたモノになった。

私の零那以外の同期である2人は特に気にしなかったみたいだけど、私は初顔合わせをした時に、自分はこのプロジェクトの最高責任者だが気にしないで接してくれると助かる、と言い放つ女の前から逃げ出したかった。折角内定をもらえたけど、所属ライバーの契約も解除してもらおうかとまで考えた。

一番偉い立場の人間と一緒に仕事をする、どこるか気安く接しろだなんて無理な注文すぎる。

だが現実是非情で、私と零那は自然と行動を共にする事が多くなった。理由は簡単、4人組は自然と2:2で分かれる事が多くなり、上から零と一、二と三で分かれた。ただそれだけ。

きっかけはそれだけ。それでも私は、あの『零から一へ』と託された日から零那に縛られ続けている。忘れた日なんて無い。

この日常がいつまでも続くと思っていた。

世界には永遠なんて存在しなかった。

居なくなつてから気付くもの。
失つてから欲しがつても手は届かなかつた。

「零那……」

ただ名前を発しただけで体中を巡るこの熱の原因は、この感情の名前はとうの昔から知っていた。まさかそれを異性ではなく、同性相手に抱くとは思つていなかった。

結局のところ当人同士の話だと言うのは簡単だ、思うのは簡単だ。ただ異性相手と同性相手だと、成功する確率があまりにも違い過ぎる。

そもそも前提条件からして違うのだから、超えなくてはいけないハードルが2つある。1つだけでも臆してしまうかもしれないのに、2つなんて難易度が倍どころではない。成功すれば大儲け、失敗すれば全て終了の賭けならば、私は挑戦などしたくない。

現状維持の何が悪いのか。絶対に成功すると確信のある勝負しかない事がそんなに卑怯か。リスクを恐れるな、なんて、よっぽどの馬鹿か本当の本物しか言えない。

私は馬鹿にもなれなければ特別でもないから、だからもう離れないように手を掴めるだけでいい。

鳥居零那が消えてから、一ノ瀬柚子の片手は空いたまま。

もう1度、チャンスがあるなら……今度こそ必ずその手を取って、離さない。

1つになれなくても

「はい、はい……じゃあ再来週の日曜日って事で。ユキちゃんもそれで大丈夫だよな?」

「ええ」

「マリちゃんもおっけーおっけー」

「全員問題無し、と。改めてだけど悪いわね、ユキ、マリ……私と早川が勝手にオフコラボしようなんて決めちゃって」

「私は楽しそうだしウェルカムでしたよ? ユキは……早川ちゃんがいるとはいえ、どう? 無理してない?」

「全然してない。むしろ今から楽しみで寝れないかも」

「まだ10日以上あるんだから睡眠はしっかり取りなさい……」

「あはは……それはあたしが責任をもってしっかり見ておきますっ」

「お、ノロケですか? ノロケですね?」

「あーはいはいご馳走様。じゃあ切るわね」

通話が切れた事を知らせる電子音が流れた。

柚子が抜けると、マリの方からもそろそろ落ちると報告があった。今日の通話の本題である、私とはやて、柚子とマリの4人で行うオフコラボの日程決めは既に終わっているので引き留める理由も無い。

はやても特に引き留めなかったため、4人いた私達の通話グループは必然、はやてと2人きりになった。

他の誰かならともかく、はやてだ。このまま通話を繋いでおく理由も無い。形式的に今日は解散しようとして提案され、私もそれを受け取った。

「……入っいいい?」

本当は壁一つ離れた距離で通話なんてしなくていいのに、態々面倒な事をしてる現状。マリには以前、妹との関係について相談した際に事情を説明したが、柚子は事情を知らないから仕方がない。

一緒にいられるなら、本当は花菜を膝の上に乗せた状態で2人並べた状態で通話したかった。腕は勿論前に回して手を握っていたりすると素晴らしい。花菜と一緒に私が話を聞く必要も特に無いから、髪かうなじにでも顔を埋めて先程お風呂から上がったばかりののいを堪能するのも悪くない。

だけどリアルはリアル、ヴァーチャルはヴァーチャルだ。

彩華と花菜は姉妹でも、ユキとはやては先輩後輩なだけなんだから。

「ねえ花菜、私の膝の上に来ない？」

「急にどうしたの……行くけど」

「んっ、いらっしやい。柔らかい、あつたかい、いい匂い……」

「彩華、気持ち悪い。ねえ……本当にどうしたの？ 熱でもある？」

「ないよ。ただ、さつきからこうしたかっただけ。いつか……いつかさ、ユキとはやてがこうしても、誰も疑問に思わない日がくればいいのに」

「……………」

自分でも夢物語だと思う。叶わない話、とは言わない。限りなく実現が難しい話だ、というだけで。

この距離感は『普通』じゃないから。姉妹というフィルターを取り払った時、これは『特別』になる。女同士だからとか関係ない。遊びなんかには見られたくない。私達が共にいる事に理由なんて必要ない。ただ傍にいたいから、それだけで誰しもが納得できるほどに世界は甘くない。

なんて理由をつけようと私達は惹かれあっている。それは絶対だ。そしてまた、普通じゃない存在は注目を集める。これも絶対だ。

私達が生きていくには、この世界は息苦しい。それならば私達以外の存在がいる時には違うフィルターを通して私達を見てもらえばいい。幸いな事に、私達の関係性は1つではなかった。そのどれをも私は愛している。彼女も、愛していると言ってくれた。

名称が変わろうとも、私は私で彼女は彼女だ。他の誰でもない私達が知っている。それだけで何も問題はない。たとえこの世界が私達2人になろうとも、いや、いつそその方が……

「こら、彩華」

「んっ……ほっぺた、痛い」

「まあ変な事、考えてたでしょ」

「エスパー？」

「彩華の考えなんて全部お見通しだってば」

「じゃあ私が花菜とちゅーしたいって考えてたのバレてたのか、恥ずかしいな……」

「またそうやって誤魔化す……」

「嘘じゃないんだけどなあ」

「いや、そりゃあ……あたしだってさ、彩華とキス、したいよ？ うん」

「上目遣いでそんなこと言うなんて襲われる覚悟はできてる？」

すぐそこにある花菜の瞳からはいきなり何するのといったクレームがバシバシ飛んできているが、そういうポーズだとわかってるから構わずキスを続ける。繋いだ手の力は少し強めた。

私を通して私以外を見つめていない相手とのキスは、なんと心地良いのだろうか。

花菜からの愛情を感じる。お互いの独り善がりじゃない、目の前にいない相手に届かない想いを伝えるわけでもない、本当の求愛行動。

直接触れている唇、手のひら、指だけではない。視線でも私達は繋がっていたし、心が繋がっている。

私達はキスの時に目を瞑る事はほとんどない。自分達で折角の繋がりを1つ消してしまうなんて勿体無いから。私達は異なる個だから惹かれあつたのであつて1つになりたいわけじゃないけど、限りなく1つには近づきたかつた。

「……彩華の、そうやってすぐキスして誤魔化すところ嫌い」

「私は花菜がそういう事を言う度にキスしたくなるんだけど、どうすればいい?」

「我慢してっ……んっ、だから我慢してつて言った傍からキスするのやめっ」

「嫌つて言つても逃がしてあげない。……無防備に、私の膝の上に乗ってきた自分の迂闊さを後悔するんだね」



「……妹に10分以上も休みなくキスする姉がどこにいるのよ」

「たぶん、今は花菜が頭を上げればすぐそこにいるんじゃない?」

「こんな意地悪なお姉ちゃんだとは思わなかつた。今すぐ逃げないと……」

「残念だけどお姉ちゃんからは逃げられません。死ぬまで一緒だよ」

「そんなぁ……と、茶番はここまでにして」

「お姉ちゃんとは遊びだったの……?」

「はいはい本気ですよお姉ちゃん愛してるちゅー……で、本題だけど」
「私も愛してるよ、花菜。だからもう1回キスしよ?」

まあ花菜はライターとしてだけでなく、プロジェクトメンバーとしてのレナさんとも面識が無いはずだから当たり前だ。名前だけ知っている先輩がそんな大物だったと知った反応としては、妥当なところだろう。

それよりも驚いて口をポカンと開けている花菜も可愛い。ちよつと抜けていても可愛いなんて自慢の妹兼、恋人兼、同僚兼……

「そういえば、レナさんからメッセージ来てるんだった。近々帰ってくるらしいよ」

「いや、急すぎ。っていうか帰ってくるって、どこか行つてたの？ ライバー復帰って事？」

「アメリカに用事があつて飛んでて、それが一段落したから戻ってくる……みたい。その用事つてのが何かは知らないけど、引退する理由の1つではあつたつて話」

「……なんか、随分とふわふわしてない？ 先輩とはいえ、仮にも半年同僚だつたんでしょ？」

「レナさんつてあんま自分語りする人じゃなかったし。そもそもメモリーズ・プロジェクトが何を目的としているのかも知らないからね。私はただV T u b e r になりたいからメモリーズに応募しただけで、興味も無かつたし」

「まああたしも、その辺は興味無いからいいんだけど……」

「でも、レナさんは私にけっこう構つてくれたんだよね。この前来たメッセージも、帰ってくるって報告以外に、妹が後輩で入ってきたんだつて？ つて聞かれたし」

「……なんて返したか聞いてもいい？」

「安心して。ちゃんと『色々』あつたけど仲良くやってます、つて返しておいたから」

「変に含みを持たせた言い方しなくていいじゃん！」

嘘はついてないし、別に何も問題無いと思うのだが花菜的には問題あつたらしい。リスナーとか現同僚に惚気るわけでもないのに。

というか私自身、レナさんにあまり嘘をつきたくない。こんな私を拾ってくれたのは間違いなくレナさんが物好きだったからだし。

直接顔を合わせたのも最終面接で仕方なくリアルで顔合わせしなくちやいけなかった時だけだけど、それでも彼女からは嫌な感じはしなかった。それだけで、私がレナさんを信用するのには十分だ。

「大丈夫。もし花菜がレナさんと顔を合わせる事になつたとしても、ちよくつとだけからかわれるだけだから」

「零那先輩の事を全然知らないけど、それだけは嘘だつてわかるよ……」

「まあ話を戻して、と。レナさんと柚子の関係……何かあつたのかと聞かれると、私から見た限りだと何もなかつたよ」

「でも、柚子ちゃん先輩の前つて零那先輩がメモリーズ全体のまとめ役だつたんでしょ？ その役割の引継ぎの時に何かあつたとか……」
「あつたかもしれないし、無かつたかもしれないね。私はその辺ノータッチだから知らない、というより表で大々的にやつたわけでもないし、レナさんが柚子に押し付けたつてだけだと思うよ。そもそも、そのまとめ役自体、レナさんがただのライターつてだけじゃなかつたらやつてたわけだし」

「なるほど……」

「たぶん、本当に何もなかつたんだと思う。レナさんは引退するつて決めてすっぱり居なくなつたから……今でこそ違和感あるかもしれないけど、レナさんが卒業する前——つまり、はやて達4期生が来るまでは、柚子と1番コラボが多かつたのは断トツでレナさんだつたんだよ」

今は一ノ瀬柚子の相方といえば茜坂マリかもしれないが、半年前は

皆が口を揃えて鳥居零那と答えただろう。もしかしたら今でもそう答える人がいるかもしれない……それくらい、2人は良いコンビだったと思う。

マリほどじゃないけど柚子を振り回していたかと思えば、決めるところは2人息がバツチり合って決めてしまうのだ。片方は冗談めいて、片方は絶対に口にしなかったけど、お互い信頼し合っていたのは誰の目から見ても明らかだった。

レナさんが引退してからは、空いたポジションを埋めるようにマリが柚子の隣に立つようになった。じゃあ、それまでマリとペアを組んでいた扱いの私はというと、同時期に入ってきた早川はやてにバツチり捕まったので問題無かったりする

今となつては収まる場所に収まった感じがするけど、流石にいくらレナさんといえどここまで全部計算はしていないはずだ。花菜の採用に、レナさんは関わっていないはずだから……それでもあの人なら、と思ってしまうのがレナさんクオリティ。

「じゃあ、何もないから柚子ちゃん先輩は悲しいって事かあ」

「たぶんね。それこそ復帰したら山ほど憎まれ口叩くけど、心の中ではめっちゃくちゃ喜んでると思うよ」

「柚子ちゃん先輩に聞かれたら何言われるか……」

「でもね、レナさんはちゃんと置き土産してくれたんだよ。それも2つも」

「へえ？」

「片方は花菜にも関係あるんだけど……実は1期生2期生はオーディションしたけど、3期生は全員レナさんがスカウトしてきたんだ」

「へえ……でもあたし、正直3期生と全然交流無いからなあ。関係あるって言われても微妙」

「うん、私も無い……3期生ってレナさんがいた頃から孤立しがちだったんだけど、いなくなつてからはほぼ同期でしか絡まなくなつちやつたから。柚子も少しボヤいてた、このままじゃメモリーズが空

中分解しちゃう」

「難しい事は偉い人に任せて……もう1つの置き土産って？」

「えっとね、少し前にやったライブイベント……とは名ばかりの、1期生と2期生が全員3Dで少し歌って踊るだけのイベント。あれを企画したのってレナさんなんだ」

レナさんがいなくなつて、柚子が初めて行う事になったビッグイベントを思い出す。

リスナーもそうだが、私達もレナさんの引退と同時に聞かされたのどても衝撃的だった。レナさんの引退にも驚いたけど、それより私にライブイベント——それもオフラインでなんてできるのだろうかという不安が一番大きかった。

それでもできたのは、間違いなく周りの皆のおかげだ。今となってはレナさんに感謝している。私にとって、灰猫ユキにとってあのイベントはターニングポイントだった。1歩を踏み出せた、仲間というものを感じられた最高の瞬間を過ごせた。

「こうして聞くと、零那先輩って凄い人なんだね……いや、もういないから実感もあんまないんだけどさ。ちよつと気になって鳩で検索したら、帰ってきて欲しいって呟きもけつこうあったし」

「登録者数もメモリーズでは1番だったし、名実ともにレナさんはトップだったんだ……隣に立っていた柚子がまだ囚われたままなのも仕方ないよ。私達にとつて半年はあつという間すぎるから。そんな簡単に忘れる事なんてできない」

「……ねえ、お姉ちゃん。あたし、ユキちゃんと離ればなれになる気はないからね？」

真剣な顔をしてこちらをみつめる花菜。

私、不安な顔なんてしてただろうか……いや、きつと花菜が不安な
んだらう。いくら身近にいても他人は他人。いつか離ればなれに
なってしまう日が来るかもしれない。

それを恐れる事は悪い事ではないけど……少しくらい私を信用し
てほしい。

今の今までずっと繋いだままの手を。抱きしめて離さない腕を。
心を。

信じられないというなら……

「ねえ花菜……さっきの約束、忘れてないよね？」

「なっ、急に何言ってるの！」

「私が離れないか不安なんでしょ？ だったら……花菜からキスして
くれたら、離れる気が起きなくなるかも」

「そういうの、この腕と手を離してから言ってくれない？」

「ほら、早く早く」

「うぐぐぐぐ……」

私達は決して1つになれない。

生まれた時から個と個だったから。

だからいつか、きつと離ればなれになってしまう。

でもそれは今から考える事では、きつとない。

ありえない話を考える暇があるなら、この唇に伝わってくる熱い熱
に身を任せて……そのまま限りなく2人を1人に近づけよう。

2人が1人になれない事は、決して悲しむ事ではない。

今この瞬間、心の中が幸せで満ち溢れている事が何よりの証明にな
る。

茜色少女の葛藤

なぜ他人と同じ事をする必要があるのか、昔の私には理解ができなかった。

今で言うところの、所謂『逆張り』をしていた。していた、というのも語弊があるけど。気付いたら私は社会のシステムに反抗する、あまり可愛いとは言えない少女だった。

きっかけは小学校。幼稚園までは特に何事もなく、どこにでもいるような子供だったと思う。

それは入学式が終わって初めての授業で起きた。定番ネタである自己紹介。その時、担任を務めた先生はこう言ったのだ。

「まずは名前。その次は好きな食べ物、好きな色を教えてほしい」

ああなるほど。今思えば、小学1年生に求める自己紹介の内容としては、まあこんなものだろうと思ってしまう。少しばかり幼稚すぎる気もするけど、あまり難しい内容を求めすぎて答えられなくなってしまうのならば、少しくらい幼稚で、それを聞いて果たして意味があるのかと尋ねたくなるような内容の方が良いかもしれない。

でも、当時の私は今の私と違って大人じゃなかった。そんな事を聞いてどうするのか、それよりもっと聞きたい事があるし話したい事があるんだと思ってしまった。

そう思っているうちに自己紹介は始まっていた。幸いと言っているものか、私の出番までまだ時間はありそうだったので、私の前に誰かが先生から出されたお題以外の自己紹介をしたら私も真似をしようと思った。

……しかし、結論から言うと私を含めた誰一人として名前と好きな食べ物、好きな色以外を言う事はなかった。



小学校生活を過ごしていくうちに、私が違和感を覚えるシーンは増えていった。違和感を覚える出来事には共通点がある、という事に気付けたのは中学校に入って少ししてからだったかな。私は、他の誰かと同じ事をやらなければいけない、という状況が非常に苦手だという事がわかった。

例外として授業の開始、終了時間。例えば男女別の更衣室、トイレ。例えば、犯罪性のある行為を行ってはいけないという認識。これらがないわけではないから、私がモラルの無い人間であるというわけではなかった。

ただ、予め題材が指定されている創作活動や、皆である1つの目標に向かって努力する——学園祭や体育祭などの——イベントの時は憂鬱な気分で登校していた。

それでも表向き普通に学生生活を過ごしていったのは、私が主張の激しい人間ではなかったからだだろう。特別仲が良いとはいえずとも校内で行動を共にする複数人とグループを組めたことや、私が協調性の意味も分からない馬鹿ではなかった事が救いだ。

結果だけ見ると、私も自分が違和感を覚えた人間と同類だったのかもしれない。自分の意見も言えず、ただ他人と同じ行動をする人形と変わらない存在。こんな生き方、何が楽しいのだろう。

疑問と否定ばかり繰り返す。

けれど、この現状に満足している自分もいた。何が楽しいのかと自問しておきながら、心の底からではなくても楽しいと自答する私がいだから。



私が彼女——鳥居零那と出会ったのは、大人になってある程度自分と折り合いをつけて生きていけるようになったある日の事だった。

彼女を見てすぐにわかった。私は『普通』じゃない、『特別』に憧れていたんだと。

若くして1つのプロジェクトを立ち上げた、知性を感じる顔つき、同じ女性として誰もがこうなりたいと思うようなプロポーシヨン、裕福な家庭に産まれた、海外の有名な大学を卒業した……そんな、彼女を語る上でプラスの要因になるものなんて全部理由にならない。

この人は『特別』なんだと一目で理解させられた。

生きざまが違う。私では彼女になれない……自分と違う人間を、私はその時初めて見つけた。やはり私は、自分があの違和感達と同類だった事に気付けた。

そして、それに感謝をしなくてはいけない。

私は『特別』にはなれなかった。だから『特別』に強く惹かれた。

それからの日々はあつという間だった……彼女の隣に立ちたいと思つて、積極的に行動を共にした。時間だけでみると、今まで生きてきた人生の中のほんの一瞬。それでも、私の中ではゴールデンタイムだ。

何物にも代えがたい最高の一瞬。

……だからこそ、彼女がメモリーズから離れるのはとても辛かった。この一瞬は永遠ではないと知ってしまったから。一瞬は一瞬でしかなく、幸せな時間は長く続きはしないと知ってしまった。

追いかけようと何度思った事か。最初はそこまで愛着もなかったメモリーズという箱も、今となっては大事な物の1つになってしまった。

彼女を追いかけるといふ事は、今まで通りといふ事は難しい……不可能ではないにしても、私にとつては環境を整えるどころか前提条件の海外へ飛ぶ事自体が一大イベントだ。そう簡単に決められない。

ここでも『普通』止まりだった私は……絶対に弱さを見せまいと思っていた彼女に、泣き落としを実行した。どうか行かないでくれと、辞めないでくれと。結果としては、そこまで言っただけ貫えるなんて嬉しいという言葉1つのみ……落ち着いて考える事ができる今となっては、迷惑と言われなかっただけ良かったと思うしかない内容だ。

それでも満足できなかった私は……彼女が最後まで教えてくれなかった搭乗予定の飛行機の番号と時間を聞き出して、直接航空で待ち伏せするまでに至った。今思うとストーカーでしかないけれど、当時の私はそれくらい本気だったのだ。

さすがに予想してなかったのか、顔を合わせた彼女は驚いて……その後、笑ってくれた。

見送りに来てくれて嬉しいだなんて、引き止めに来た私に対して。先日の話の内容、私の今の表情からして、私がここに何をしに来たかなんて彼女が理解できないはずがないのに……理解して、私の言葉を聞くつもりがないんだとこちらも理解した。

彼女は、私の目の前で飛び立っていった。

私は今日、何の為にここに来たのか……最後のあがきは失敗に終わった。これからはまた、『普通』に紛れて日々を過ごす事になる。

でも意味が無かったわけじゃない……最後に彼女と話せた。それだけでも、『普通』から脱しようとして1歩を踏み出した甲斐があったと思う。おう。

それにきつとまた会える。物理的な距離は離れても、もう2度と会えないわけじゃない……今日みたいに、1歩だけでも踏み出せば世界は変わるんだ。

私があの人を見つけたきつかけは偶然だったけど、出会った事はきつと必然だったに違いない。

不満だらけの現実に嫌気が差してきたあの時、あの人に出会えた。その為だけに今まで生きてきたのではと思えた。

だから、今は離ればなれになったけど……また、会えると信じて。私は今日も生きていく。あなたが作ったメモリーズの一員として。



最近、柚希先輩の様子がおかしい。何がどうおかしいか……そう聞かれると答えるのが難しいけど。

見た目は普通（ここでいう見た目はリアルで会った話でなければ、勿論ヴァーチャルのアバターの話でもない）だけど、中身がちよつと変というか……この表現の仕方だと、柚希先輩がガワだけ普通に性格がヤバイ人みたいだけどそうではなくて。

たとえば鳩での配信告知はほとんど定型文だから違和感ないけど、日常の吹きがちよつと少な目&無理に明るくならうとしているというか…… 元々柚希先輩は吹き自体少な目だし、内容に関しても疑い過ぎといえればそれまでだ。

配信は特に問題もなくいつも通り。だけどそれが逆に怪しさを増している。柚希先輩は公私混同という言葉が嫌いなはずだから、絶対に配信でボロなんか出さない。それどころか、むしろいつにもまして調子が良くなるまである。意味不明だけど。

そしてつい先程の柚希先輩、ユキ、早川ちゃんとの通話で確信した。やっぱり何か隠してる。根拠はないけど確信したっただけだ。信じるときは女の勘だけで十分。

「とはいえ、何を隠しているのかさっぱり見当もつかないんだよなあ

……」

柚希先輩ほどの人にもなれば、そりゃあ隠し事の1つや2つはあつて当然だろう。というか私だって大きな声では言えない事はあるし、人間誰しもそうであるはず。

じゃあ何が問題かといえば、私なんかにはバレるほどわかりやすい隠し事をしている事だ。

特別自分が隠し事に敏感だとか鈍感だとか思つた事はない。それなりに長く、それなりに関りがあつて、それなり以上には気にかけている柚希先輩だから見つけられただけ。つまり、その条件を満たせば誰でも気付けるわけで……

「私には隠し事するなつて言うくせに、自分が隠し事するなよう……」

すぐバレるんだから隠し事なんかするなと言うけれど、そつちだつてすぐ……ではないけどバレるんだから隠し事なんてしないでほしい。

そんなに私は頼りないのだろうか……そういう問題じゃないんだろうな。私だって、柚希先輩が頼りないから隠そうとしていたわけでもないし。

無駄にプライドが高いというか、弱みを見せたがらない人だから。メモリーズのまとめ役を引き受けてから余計にその傾向が強くなつた。

もしかすると誰かに相談しているかも、と思つたけど……柚希先輩の性格を考えるとその線も薄くなつてきた。

相談してすぐどうにかなる話だったり、自分1人じゃどうしようもない話なら、たぶん現状こうはなつていないから。

「3期生と4期生は絶対ないとして……可能性があるなら1期生か2期生……?」

その薄い線を考えてとしたら、まず3期生と4期生は候補から外れる。

柚希先輩がまとめ役になってから入ってきた4期生相手には見栄っ張りが発動して絶対相談しないし、3期生は関りがあまり無い(それでも私達よりは立場的に多い)から切つていいはず。むしろ3期生に関しては隠し事の内容の可能性までありえる。

今のメモリーズ内の状況を考えるとありえない話ではないけど……確証もないから一旦置いておく。

じゃあ1期生か2期生かと考えるも、前提からして相談するとしたら同じライブより運営側にするものでは?と結論付いてしまった。

それに、何も悩みがVTube関係の話とは限らない。柚希先輩は社会人としても普通に働いているんだから、そっちの線もありえる……公私混同はしないとはいえ、相当深刻な悩みだったら可能性は0ではないか。

「ダメ元で何人が当たるかあ……」

考えてもどうにもならないので、メモリーズ内でそれとなく聞いてみる事にした。

全体チャットでなんて聞けるわけがないので、個人チャットを使用する事になるけど……可能性が高い1期生より、気軽に聞ける同期の2期生から先に聞いてみよう。具体的には灰猫ユキとか。柚希先輩の話題にかこつけてユキと会話したいなんて下心はないのである。



「返事が来ない……」

ユキにチャットを飛ばして10分が経過した。

通話が終了してから多少時間が経ってはいるけど、まだ寝るには早い時間だ。ユキのアカウントも退席しているわけでもない……一応、早川ちゃんの方にもチャットで、伝え忘れがあったからもう1度集まれないか、と書きこんだけど反応が無い事から状況を察するしかない。

通話の最後で惚気たと思ったら、その後すぐにお楽しみとは……幸せそうでよかった。

とはいえ、次の候補はと考えても思い浮かばない。本命である1期生の先輩方に行くのが妥当だけど……多分、空振りだろうしなあ。というか今2人とも配信してた。リアクションがすぐ欲しいわけではないけど、とりあえず保留ってことで。

「うゝむ、うゝむ………あっ」

どうしたものかとフレンドに追加してある名前を眺めていたら、その中の1つに目が止まった。

紅 林檎……少し前に、柚希先輩と夜中通話をしたと言っていた彼女なら何か知っているかもしれない。

時期的には少し前すぎるような気もするけど、現状で可能性がある

としたら彼女が一番だろうし……当たって砕けろ、女は度胸と柚希先輩も言っていた。いや言ってなかったけど……私の中の柚希先輩が言っていた事にしておく。

「もしもし、マリちゃん？　マリちゃんから通話なんて珍しいね？」

「あ、もしもしリンゴン〜？　いやいや、ちよびつと聞きたいことがあつてですね〜」

「私に答えられるならいいよー？　力になれるかは、わかんないけど……」

「あはは、そんな難しい話じゃないから大丈夫だつて……聞きたい事は1つだけ、最近柚子ちゃんパイセンから何か相談されたりした？」
「え？　柚子ちゃん先輩から相談？　……いや、私は何も聞いてないかなあ」

少し考えるような素振りを見せたリンゴンだったが結果はシロ……だけど、何か隠してますと言わんばかりの間があった。

リンゴンは嘘をつくのが苦手だなあと苦笑しつつ、何かを隠そうとしている彼女には申し訳ないけれどどうにかして話してもらおう。

私も、この件は引けないから。誰でもない柚希先輩の事だ。恩なんて返せないほどあるし、下心も無ければ弱みを握りたいわけでもない。ただ純粹に、悩み事があるなら私も力になりたいと思っっているだけ。

柚希先輩に聞いても絶対教えてくれないだろうから、他の誰かから勝手に聞いて、勝手に巻き込まれてやる。

「リンゴン？　嘘は良くないなあ、嘘は。私は本当の事を聞きたいんだよ？」

「う、嘘じゃないし！　私、柚子ちゃん先輩から相談なんてされてない

し！」

「じゃあさっきの間はなんだったの？」

「うぐっ」

「ねえ、教えて？ あの人が何を隠してるのか……何に悩んでいるのか。私、いつつもお世話になってるからさ。そのお礼とか、そういうわけじゃないけど力になりたいんだ」

「うぐっ、うぐぐう……」

しばらく唸っていたリンゴンだったが、やがて諦めたのか1つ大きくため息をついて……似合わない隠し事をしていたその口を開いた。

「私、柚子ちゃん先輩から相談は本当にされてない……けど、何を隠してるのか、何を悩んでるかは心当たりあるんだ」

「本当に!？」

「うん……あのね、これは誰にも言わないでほしいの。大事にはしたくないから。これを守るなら、マリちゃんにも話すよ」

「わかった。だから聞かせてほしい……」

「……全然悩まないんだ。うん、じゃあ話すね」

リンゴンから語られたのは、近いうちに零那先輩が帰ってくるというただそれだけの事だった。でも、私はそれだけで納得してしまった。

柚希先輩の心を乱すには確かにそれだけで十分か、と。

「……うん、なるほど。ありがとね、リンゴン」

「マリちゃん、わかっていると思うけど」

「大丈夫、誰にも言わない……無理言つてゴメン、今度何か埋め合わせするよ」

「え？ そんな、いいって。そこまでしてもらわなくても」

「リンゴンに拒否権はないから……マリちゃんの決定は絶対なんです！」

「くすつ、そっか……じゃあ、うん。楽しみにしとくね」

「うん。ありがとう」

……過去が、すぐそこまで迫っていた。

鳥居零那先輩。かつて、一ノ瀬柚子の隣に立っていた人。私の前の、一ノ瀬柚子の相方。私が超えるべき相手……なんて、わけでもないけど。

でも昔から、零那先輩の事は意識していた。私はどうしてこの人じゃないんだろうって思った事は数知れない。

柚希先輩の隣に立てるというだけで羨ましかった。私は所詮、お下がりを貰っただけ。お下がり扱いなんて柚希先輩が聞いたら憤慨物だろうけど。

「零那先輩……なんで今さら、帰ってくるんですか」

1度消えたのなら、もう2度と帰ってきてほしくはなかった。

貴女は一ノ瀬柚子を1度傷付けただけでは足りないのか。貴女が消えた直後の彼女の姿を知っているのか。貴女が押し付けた立場の重さを本当に理解しているのか。

私個人として、一ノ瀬柚子という存在を考えなければ、鳥居零那の事は尊敬する先輩の人だと答えられるだろう。

けど今さら、私は彼女のことを友好的には見れそうにない。

もし、再び貴女が柚希先輩の前に現れるとしたら……

「……私は、どうしたらいいんだろう」

いつかもう1度会えたらと思っていた。

1度は離れてしまったこの手が、もう1度届けばと思っていた。

顔を合わせたら何を言っつてやろうかと考えていた言葉も全部飛んでしまった。

まさか、まさか今、心の準備もしていない不意打ちの状態で会えるなんて……

「久しぶりだね、柚子」



日曜の正午過ぎといえば、いつもの私にとってはまさに配信を開始するような時間だ。

土曜の夜から日曜の朝方にかけて配信した後には就寝、昼前に起床して正午過ぎから夜まで2回戦を行う週末をここの1年程度過ごしてきたので、今少し落ち着かなかつたりする。

とはいえ仕方がない。他の誰でもない、メモリーズ運営からのお呼び出しだ。毎週の習慣化している配信を楽しみにしているリスナーには悪いと思うけど、私に都合の良い日で大丈夫と言われてしまうと週末しか空けられなかった。

「失礼します、一ノ瀬柚子です」

会議室に入ると流石に運営全てではなく、一部のスタッフ……零那が抜けた後のプロジェクトリーダー代理や、1〜4期生までのマネージャーの合計5人だけが私を待っていた。

仕方のない話だけど、やはり私待ちだったようだ。彼らにとってはここが職場なのだから私だけが外から来る形になるとはいえ、会議の日時まで融通してもらった事もある。少し申し訳なさがある。

ただ1つだけ疑問なのが、何故今日に限って私を事務所に直接招いて会議を行うのだろうか、という事だ。

私が零那からメモリーズ全体のまとめ役を押し付けられてからというもの、何度かこのメンバーと会議をさせてもらう事はあった。

内容は当然メモリーズメンバーに関わる事……とはいえメモリーズは基本的に良い子ちゃんばかりなので問題行動も無い。最近でいえば2期生の誰かと4期生の誰かの突発オフコラボの事前・事後会議をしたくらいで、それも運営からすればそこまで大事でもなかったらしく私はリモートでの参加だった。

なお、私はその事前会議で実の姉妹を同じ箱でライバーデビューさせる会社がある事を知った。面白ければなんでもいいわけないだろう。売り出し方も実の姉妹設定じゃなく赤の他人設定で出しているなんて、リアルバレの危険性とか考えてないのかと頭を抱えてしまったのも懐かしい。

「あの、早速で悪いのですが……なぜ今回私は直接呼ばれたのでしょうか?」

「その方が良いとの意見がありました、私達がそれに納得したからです」

「その方が良い……それは誰の意見か聞いてもよろしいですか? マネージャー……ではないわよね?」

「違います」

「じゃあいったい誰が……」

そう言った時、私は違和感を覚えた。私が到着したことでメンバーは全員揃ったはずなのに、まだ会議が行われていないのだ。

始めるタイミングはいくらでもあった。私が到着して席に座った後でも、いつでもよかったはずだ。

たしかに、まだ会議予定の時刻より少し早い。呼ばれた身として予定していた時間よりもいくらか早く着くことはできたけど、結局5分ほど前に到着する程度の時間に調節した結果だ。あまり早く着きすぎた方が迷惑になってしまう。

それでもメンバーが揃ってしまった以上、少し早くても会議を行わない理由も無いはずだ。今まではそうだった。全員揃った段階で会議開始をしていた。

それなのにまだ行われぬ……それは、まだ顔を見せていない参加者がいる？

「——どうやら私達が最後のようだ。待たせてしまったね」

普段と違う状況への答えが出た次の瞬間には、まるで私が回答するのを待っていたかのようなベストタイミングで答え合わせがされた。

会議室に入ってきたのは、2人。1人は私より少し年下……マリヤユキと同じくらいと思われる女。見たのは初めてだけど、まだスタッフとは断言できない。メモリーズ内の1期生と2期生とは全員顔を合わせた事があるけど、3期生と4期生は逆にまだ誰ともリアルで会っていないから。

そして、見知らぬ女の隣に立つもう1人。待たせてしまったと言いつつ、申し訳なきような顔をしているわけでもないこの女を忘れた日はない。

半年以上ぶりに見たけど、記憶と何も変わっていないかった。

「お待ちしてました、リーダー」

「今はそっちがリーダーでしょ？」

「あくまで代理です。まだ籍はありますし、いつでも帰りを待っていますよ」

「まあその話は今関係無いから後でね……さて、時間だ。会議を始めようか。まず、最初に……」

彼女が来た瞬間にこの場のトップが入れ替わった。否、元に戻ったと言うべきか。

私と同じく、あの人も彼女から立場を預かっていただけにすぎないから。

メモリーズ全体のトップは、今も昔も変わっていない。

いつかもう1度会えたらと思っていた。

1度は離れてしまったこの手が、もう1度届けばと思っていた。顔を合わせたら何を言っやろうかと考えていた言葉も全部飛んでしまった。

まさか、まさか今、心の準備もしていない不意打ちの状態で会えるなんて……

「久しぶりだね、柚子」

「……いつ帰ってきたのよ、零那」

「昨日の夜に帰ってきたばかりさ」

「事前に一言くれてもよかったじゃない」

「それは帰ってくる事について？ それとも、今日ここに私が来る事について？」

「どっちにも決まってるでしょ！ 大体、急にいなくなって急に帰ってくるなんてどういう——」

「……あの、零那さん。私、いらないうたいたいなんて帰っていいですか？」

ようやく現実が見えてきたことで、散々零那に言いたかった言葉ぶつけられるはずだったけど、零那と共に入室してきたもう1人によって遮られた。

どこかで……いや、確実に聞いたことのある声。外見を見ただけではわからなかったけど、こうして声を聞いたら正体に当たりが付いた。

そして今日の会議の話題も自然と理解できてしまう。

「すまないね、いらないうたいたいじゃないから少し我慢して？」

「……まあ、いいですけど」

「良い子。と、もしかして2人はこうしてリアルで会うのは初めて？」

「じゃあ自己紹介しようか」

「……一ノ瀬柚子よ」

「あ、どうも。メモリーズ3期生やってます、浮世うきよ 月日つきひです」

お互いにはじめましてではないけど、こうして顔を合わせるのは初めてだから自己紹介をする事にはまだ慣れない。

リアルで会ってみてイメージと違うという例もたまにあるけど、浮世さんと実際に会ってみるとそこまでイメージとの差異も無かった……というより、恥ずかしながらあまり私が彼女のことを知らないだけなんだけど。

名前とあちらの顔は勿論、簡単な性格等プロフィールくらいは把握してたけど、まあそれまでで。

浮世さんに限らず、私は3期生とはコラボをした事が無かったから彼女たちを知る機会もあまり無かった。同じ箱、同じグループで活動

していながら不干渉とまではいかず、距離の近い他人同士で過ごしてきてしまった。

「さて、それじゃあ今日の議題について改めて確認しよう。……最近、メモリーズ内で3期生が浮いてしまっているのではないかという意見を見かけるようになってきた。一応3期生の皆は私が連れてきたし、ライバーを引退して運営としても離れている私だけど、今回だけ顔を出すことにした」

「私は零那さんに連れられて3期生代表としてきました。あ、事前に3期生で話し合いはしてきたので」

「うん、じゃあ……っと、つい私が仕切ってしまった」

「構いませんよ、そのまま続けてください」

「今はそっちがリーダー、ってくだりはさっきやったし、まあいっか。じゃあ運営側からの意見を聞きましよう」

「それでは、運営側からは代表して私が……先程、リーダーからもあったように、ここ最近で3期生がメモリーズ内で浮いているといった意見を見る機会が増えました。具体的には鳩などのSNSツール、3期生の配信アーカイブや切り抜き動画に付いているコメントですね」

ここまででは現状の認識のすり合わせだ。

零那という存在を失ってから、3期生はめっきり同期以外と絡むことが少なくなってしまった。

最初は偶然かもと思っていたリスナーも、この異常ともいえる事態に気付き始めてしまった……本当は私になんとかできればよかったけど、今さら嘆いたってあとの祭りでしかない。

それよりも、こうして場を設けてもらったからにはどうにかして現状を打破しなくては。その為の会議だ、何の為のまとめ役だ。

「そして我々運営からの意見、方針としては現状が悪化する事は望んでいません。この業界に限った話ではないですが、同じグループに所属している者同士の関係性が良くない事をプラスに捉えられるわけもないですから」

「この業界は特にその傾向が顕著だから気を付けないとね。簡単に不仲だなんだと言われてしまう」

「はい。なので、現状が悪化するようなら何か手を打ちたい……ですが、ギリギリまではライバーの意見を尊重します」

「なっ……」

「なるほどね。じゃあ同じ運営から3期生のマネージャー、何かある？」

「はい。基本的に代表が述べた方針ですが、私は専属のマネージャーなので、より近くで彼女たちを管理していきます。最終的にギリギリのラインを見極めるのは代表ですが、定期的な報告を心掛けます」

「うん、けっこうだね。それじゃあ次は……柚子、君から見て現状はどう？」

まさか運営が現状に肯定、とまではいかななくても早急な対応をするつもりが無いとは思わなかった。

いや、運営は実際にライバーとして活動しているわけではない……つまり、私達と現状の認識が違っているわけだ。

勿論、零那もそれがわからないわけじゃない。だからこうして運営同士だけじゃなく、私というライバー目線の意見も求めている。

だったらここで現状の危うさを説かなくては。

「私は、現状がとても危うい状況に思えるわ。今まで気付かなかった、言わないようにしていた意見が顔を覗かせている……この時点で、問題は静観していられる状況を超えていると思う」

「なるほど確かに。柚子の意見も一理あるね。運営からは何か反論あ

る?」

「いえ、確かに一ノ瀬さんの意見も尤もです。私達も、現状を良くは捉えていません」

「だったら……!」

「うん。だからこそ、ここで大事なのは当人たちの意見だよ。これを聞かない事には何もできないからね」

「あ、やっと出番ですか」

ネイルを弄っていた浮世さんが、やっと話が自分の番に来たと察して顔を上げる。

今まで、いかにも私には関係ない話ですといった態度で下を向いていた彼女がようやく会話に参加する意思を見せた瞬間だ。

彼女が、彼女たち3期生がどういう意見を持ってこの場に臨んだのかわからない……だけど、どうにも良い予感はない。

「月日、3期生の意見を聞かせて欲しい。君たちはどうしたい?」

「はいですね……私たち3期生ですが、特に困っていないので現状維持を望みます」



「わかった。じゃあ、運営はどうする? 彼女たちの意見を尊重するかい?」

「そうですね、今のところは現状維持で問題ない範囲だと判断します」

「あ、そうですね。じゃあそれをお願いします」

何を言っているのかわからなかった。

何も困っていない？ 現状維持を望む？

同期以外とほとんど絡まず外交せず、リスナーからは同期以外と不仲説まで流れ始めても何も困っていないなんて正気なのか。

このままマイナスの意見が増えていって身動きがしづらくなるかもしれないのに、それに運営も力になってくれると言ってくれているのに現状維持を望むなんて……理解ができない。

「貴女たち、現状が理解できてないの……？」

「え、そんなわけないじゃないですか。アーカイブのコメントとかマシマロで、同期以外のメンバーとコラボしないのかって偶に来るし。だけど私たちがいつ誰とコラボしようが、リスナーに関係なくないですか？」

「それで貴女たちの立場が悪くなったらどうするの!？」

「え、それだけで立場って悪くなるんですか？ じゃあ嫌いな相手ともコラボしなくちやいけないとか？ ていうか私たち、別に同期以外にも普通にコラボしてますよ。そりや頻度は段違いですけど」

「それが問題だって言ってるの！ 仲の良い相手がいるのは結構だけど、バランスを考えなさいってこと！ 貴女たちの行動のせいで、メモリーズ3期生とそれ以外が不仲だなんて言われたら全体が迷惑するわけで……本当は、まとめ役の私が」

「それ」

「なんとか……えっ？」

「その『まとめ役』って言葉、あんま好きじゃないんで止めてもらっていいですか」

「あんま好きじゃないって、今はそんな事を話してるわけじゃないで

しよ！ 話を逸らさないで！」

「……あのさ、折角遣いたくもない気を遣ったんだけど。気付いてくれない？ その、自分は偉いんだから言う事を聞けって態度が気に入らないから黙れ、って言ってるの」

まさか後輩から、黙れと言われる日が来るとは思わなかった。

ずっと今日の会議に興味の無さそうな顔をしていた浮世月日はすっかりいなくなり、目の前には私に対してギラギラとした敵意を向けている1人の女がいた。

なんとなくユキみたいな子だなと思っていたさつきまでの自分もどこかにいつてしまったみたい。

この女は気に食わない相手にはどこまでも噛みつくタイプだ。どちらかといえば私の仲間……つまり同類。

「まさか後輩から黙れなんて言われる日が来るなんてね。先輩やってよかったわ」

「私も、本人目の前にして言えてやっとスッキリしましたよ。今日は帰って3期生の皆に自慢できます」

「あら、私って3期生から嫌われているのかしら？」

「ええ、満場一致で」

「あらあら、それはどうも」

「ついでに、貴女の事をメモリーズのまとめ役だと思っっている人間も3期生にはいません」

「そう。でも、残念ながら貴女たちが慕っている鳥居零那から直々に任命されちゃったもので。私も好きでやってるわけじゃないの」

「……だから、そういうところなんだってば」

少し落ち着いてきた浮世月日の瞳に、また火が灯った。

私に対する、明確な敵意の炎。

憎い相手を燃やし尽くして消し去りたいという思いが伝わってくる。

それでも逃げるわけにはいかない。ここが正念場だ。

「好きでやってるわけじゃない？　はっ、嘘ばかり。口ではそう言っても態度は正直ね」

「何が言いたいわけ？」

「運営気取りもいい加減にしろ、ってこと。自分の事で精一杯なのに、よくまとめ役とか名乗れたものね」

「意味がわからないわ」

「あんまり他人の事情にとやかく言う趣味もないし、ましてリアルの話だけど……先輩、昼間は普通に働いてるんでしょ？」

「ええ。それが何か？」

「いいえ、別に。立派だと思いますよ。私は所詮高卒ですから……でもね、平日昼間はライターとは別に勤務をして、それ以外の時間は自分の配信の時間。それでよく、私はまとめ役だなんて言えるな、と」

「……その何が問題なのよ」

「気付かないフリは見苦しいですよ。まあ結局のところ、あんたは自分の時間しか取ってないわけ。まとめ役を自称しておきながら連絡も碌に取れないなんて笑えるわ」

「じゃあ、何？　私にライター一本でやれって言いたいわけ？」

「そこまでは言っていないってば……たださ、役目も果たしてないのに態度だけ偉そうなのが腹立つのよ。零那さんから任命されて嫌々やってるんだったら、その役目返しなさい。あんたにその役目は不相応なんだから」

確かに、私がまとめ役として大した仕事をしていないのは事実だ。メモリーズは良い子ばかりで手がかからない、というのも間違つて

いない。

でもそれ以前に、どうしようもない話はまず運営が対処してくれる。だから私に回ってくる相談なんて、本当にただ悩みという名の愚痴を聞いて欲しいくらいなもの。

そして、その相談をする為のコンタクトを取るのも簡単ではない……こんな相手に相談しようとする相手なんて、本当に限られていた。

だから私は、浮世月日に対して言い返せなかった。

それでも1つだけ譲れない……どうしても譲れないものがある。

かつて零那と繋がっていたはずの、今は空いてしまった手に1つだけ残った確かな繋がりを奪われるのだけは、許容できなかった。

「……それでも、私はまとめ役を続けるわ。至らないところがあったのは認める。口では押し付けられたけど言ってたけど、本当は満更でもなかったのも認める。だから、これからは」

「あ、そうですか。じゃあ勝手にどうぞ。私たちも勝手にやるんで」

そう言い残して、浮世月日は会議室から出て行った。

会議の結論としては3期生の希望通り、現状維持……そのまま今日は解散となった。

また会えた零那だけど、こんな気分であだったらどこか行かないかなんて誘えるわけもなく、私は自宅へ直帰する事にした。

帰りの電車内で、帰ってから行う予定だった今日の配信は無しにする旨を鳩でつぶやいた。すぐに届く反応からは、特に否定的な意見も見当たらない……偶にはゆっくり休んで欲しいといった労いの言葉や、今日休みの分いよいよ来週4人で行うオフコラボは楽しみにしている、といった温かい言葉ばかりだ。

家に着いたタイミングで、見計らったかのようにマリからチャット

が届いた。

態々鳩ではなく、個人チャットに——何かあったら話聞きます、だなんて。

あんたが私に悩み相談の真似事しようだなんて10年早い、とだけ送ってシャワーを浴びに浴室へ向かう。

本当は何もやる気が起きないからさっさとベッドにダイブして夢の世界に飛び立ちたい……けどその前に、どうしても全身に広がる憎悪の炎を洗い落とさないと。

決して、何か熱いものがこみ上げてきて目元が濡れてしまうのを誤魔化すわけではない。

嫌なモノなんて全部流れてしまえ。

幸せへ続く道の選択

いつかもう1度会えると信じていた。

1度は離れてしまったこの手だけど、必ずもう1度届かせてみせると。

だけど、今こうして彼女が帰ってきたら迷ってしまっている……何を迷っているんだ。

すぐそこまで来ているのに、手を伸ばさない理由はなんだ。

——全部わかってる。迷う理由も、手を伸ばせない理由も。

「今、こうしている間にも……」

わかっている。時間がない。

帰ってきたとはいっても、またいなくなるかもしれない。

だとしたら今こうしている時間に会いに行け。

会いに行つて、そして……そしてどうする。

いや、どうするも何も無い。ただ一緒にいられば、それだけで良い。

特別な事なんていら無い。彼女の隣に私が立っていられれば、それだけで。

「……………」

そうと決まれば、早速連絡すればいいのに……私の体はちつとも言う事を聞きやしない。

ぐずぐずするな、決めたなら早く行動をしろ。

そう思つても、連絡手段として手に取つたスマホは私の手を離れていった。

文字通り、手持ち無沙汰になった私の手は自然と目を覆うように動いた。

何も考えたくない。

私のこの身を焦がすほどの熱のまま行動できれば、どれだけよかつただろうか。

何も考えずに。何も迷わずに。何も遠慮せずに。

そう、遠慮だ。

結局、私は遠慮していたのだ。

何に？ 私は一体、何に遠慮している？

考えたくない。思い出したくない。

何を遠慮する必要があるんだ。私は彼女だけいけば良いんだ。

鳥居零那以外なんていない。

メモリーズという箱も、私が鳥居零那を待つ為だけの箱でしかない。

だから私は他に何もいない。

「……………本当に？」

本当にそうなのか。

私は、本当に鳥居零那以外の何もいない？

いないはずなんだ、私は『特別』以外はいない。

同期なんていない。

後輩なんていない。

事務所もいない、スタッフもいない。

V T u b e r もいらなくなるし、だったらリスナーもいない。

この国になんて未練もないし。やりたい事はここじゃなくてもできるから。

じゃあ何もいらぬ、うん。鳥居零那以外は。何も……………全部捨てないで。

「全部捨てて……………全部捨てて、その先に何かがあるの？」

全部捨てた先にあるのは、ただ1人の女だけ。

それで私は幸せか？ 幸せなんだろうな。だって全部捨てたから。

それしかいらぬから、それを手に入れるために全部捨てて……結局、私は幸せじゃありませんなんて言ったら道化でしかない。全部断ち切った先にあるものは幸せじゃないといけぬんだ。当人たちだけでも幸せじゃないと……そんなバッドエンドはいらぬ。

「全部捨てるのが私のハッピーエンドなの？」

本当に全部、私の約2年を全部捨てた先にあるものが幸せなんだろうか。

……いや、私の幸せってなんだ？

鳥居零那の隣に立つこと？

確かにそれは幸せだ。私がずっと願ってきたことだから。

でも、それで終わりなの？

ただ1人の為に全部捨てて。並んで歩いて、はい終わり。

私はそれで満足だけど、彼女は？

彼女は隣に立った私をどう思うだろうか。

興味を示してくれるだろうか。それとも……

そもそも、どうして私は彼女の隣に立ちたかつたんだっけ。

そう、あれは確か……

「あっ」

見えた。

わかった。

私がどうしたいのか。

私の本当の願ひ。

ぐだぐだと考えていた頭がスッキリとしていく。

こんな簡単な事をいつまでも悩んでいたなんて……私はどれだけ前が見えなくなっていたのか。

こうするべきだと決めたら、体はすぐに動き出した。

今すぐ彼女の声が聞きたい。1秒でも早く、1分でも長く。でも悩んでよかった。これが私の幸せへ続く道だと、はつきりわかるから。

だから、今会いに行きます。

待っていてください。

レーナさん。

【緊急オフコラボ】後輩が家にやってきた【一ノ瀬柚子
／茜坂マリ】

「わたしがきたー！」

『きちやー』『待ってた』『わこつですくw』『キヤーマリチャーン』『つよそう(小並感)』『勝ったな(確信)』『わたがしきたー!』『オフコラボありがとう』『生きがい』『何気にあんなかったマリゆずオフコラボ』

「おーおー、みんな盛り上がってるねえ！これはマリちゃんも負けられない！このままエンジン全開でぶっ飛ばしていくぜいー！」

「それ以上うるさくしたら家から摘まみ出すわよ」

「はい、というわけでね」

『エンジン全開のマリちゃんはどこ？ここの？』『そんなものはない(腹パン)』『保護者きちやー』『えー現在時刻は夜の8時』『うーん、そろそろいい時間』『騒いだら完全に近所迷惑なんだよなあ』

「そうだぞー？もういい時間なんだから、この枠を見る時は部屋を明るくして画面から離れて見るんだぞー。」

「騒ぐなって話から逸れてない？」

「まあどつちも大切ってことですよ」

「……さて。なんか知らないけどオチがついたから、いい加減始めていくわよ」

「いえーいー！」

「うるさっ。だから……騒がないで貰える？ただでさえ近くて鬱陶しいのに、耳元で大声出すようなら本当に帰ってもらおうわよ？」

「へへっ、すいやせくん」

『は？』 いちやいちやしないでもろて』『柚子ちゃん家の壁になりたい

だけの人生だった』『じゃあ俺は観葉植物』『床は貰った!』『床になりたい兄貴はマゾヒスト?』『なんだかんだ言いつつ柚子ちゃんは追いつけなかった、俺は知ってる』『お前は誰やねん。でも俺も知ってる』『多分みんな知ってるゾ』

「とかコメントでは言ってるけど、どうする?　そろそろ追い出されてみる?」

「流石にそろそろ夜は冷え込んでくるんで、ちよつと遠慮したいなあ?」

「なるほど。じゃあ、追い出す時は前みたいに夏場にでも追い出してあげるわ」

『マリちゃん前科あって草』『いや、追い出されたことあるんか?』『夏場は逆に夜でも暑くて地獄なんだよなあ』『夜だから街灯とかに虫が群がるしな』『最近の四季(大嘘)だし、家無いからこれから冬本番なのに大変だわ』『ホームレス兄貴!?!』

「いやー、もうあれは勘弁してほしいな。ってマリちゃんは言うてみたり」

「だったら、ちよつとは大人しくしてなさいっての。……はい、それじゃあ今度こそ始まりました今回の生放送。お送りするのはチャンネル主である私、一ノ瀬柚子と」

「ゲストの茜坂マリでお送りします……はじまるよ!」



「そろそろいい時間ね」

「あらら、ほんとですねえー。今日は突発オフだったし、本番は明日だから……今日はここまでかな？」

「あんまり夜遅くしない為にちよつと早めに枠取ったから、これで長くやっても仕方ないし……終わりましたよるか」

『いかないで』『マリゆず成分補給完了!』『明日はユキはやもあるぞ!』『えっ、いいのか!』『どうでもいいけど、《ユキはや》じゃなくて《はやユキ》な。どうでもいいけど』『オタク君急に早口になるじゃんw』『実はゆずマリ派です(小声)』『柚子ちゃんは右固定って小学校で習わなかった???』

「まだまだコメントは盛り上がってるけど、さつきも言ったように本番は明日だからー!」

「明日は私の枠で私、茜坂マリ、灰猫ユキ、早川はやての4人でオフコラボをするから、是非ご視聴ください。時間は午後の14時からです」

「いつもの柚子ちゃんパイセンの日曜昼枠に比べると、ちよつと遅いけど……なんと午前は4人でダブルデートをしてから、その後はランチの予定があるのでごめんねー!」

「それではこの配信は、メモリーズ所属の一ノ瀬柚子と」

「茜坂マリでお送りしましたー! また明日ねー!」

「……よし、これで配信は終了ね」

「お疲れ様です」

「お疲れ。って、言うほど長くやったわけじゃないけど、とりあえずね」

エンディングが流れ終わり配信終了を確認すると、それと同時に『茜坂マリ』のスイッチも切れるのを自覚する。

『茜坂マリ』は理想の自分だ。

年上の先輩にも物怖じせず、同い年の同期とも壁を作る事のない存在。

リアルな『ひまり』じゃできなくても、バーチャルの『マリ』ならできる。

逆に、『マリ』にできなくて『ひまり』にできる事は特に思いつかない。

私は現実世界に生きていながら、バーチャル世界に作った仮想の自分に劣っている。

「あの、これからどうしますか?」

「そうね……寝るにはいくら何でもまだ早いし、かと言って特に何かする事があるわけでもないし。なんとも贅沢な悩みだわ」

「……そうですね」

ほら、配信が切れただけでこれだ。

そうですね、じゃないだろう?

私は何の為に来たんだけ?

ただ柚希先輩の家に泊まりに来ただけか?

「……違う」

「ん? どうしたの、ひまり。何が違うって?」

過去が、すぐそこまで迫っている。

かつて柚希先輩の隣に立っていた人が、再び姿を見せようとしている。

柚希先輩はどうしたいんだろう。

もう1度、あの頃のように戻れたらと思っっているのだろうか……思っているのだろうか。

零那先輩がいなくなった直後の柚希先輩は、とてもじゃないけど見れたものじゃなかった。

1番近くにいた人を失った直後にも関わらず、いなくなったその人は全てを柚希先輩に託して——託したなんて綺麗な言葉なわけがあるか。

あれは押し付けだ。

柚希先輩が断れるわけがないと知って、あの人は押し付けたんだ……！

口では文句も言うだろうし、きっと不満だという態度を示すだろうけど……それでも断らないなんて零那先輩が知らないわけがない。

だって柚希先輩がそういう人だって、私ですら知ってるんだから。

「あ、ひよっとして贅沢な悩みだって事に対して違うって言ってるわけ？ でも、空いた時間ができるっていうのは贅沢よ？ 貧乏暇なしとも言うじゃない」

「……………柚希、先輩」

手を取ったふりをして傷付けられて、断れないと知りながら負担を押し付けられて……それでも、柚希先輩は零那先輩を諦めてなかった。

許せなかった。無力な自分が、再びあの人の後輩となれて喜んでい自分が、違う世界で違う姿と名前を手に入れただけで変わったと思っただけだ。

零那先輩がいなくなった事に喜ぶ自分が嫌いだ。あの人を隣で支えてあげたいという思いが、邪魔な女がいなくなって清々したという思いだと知ってしまうから。

零那先輩がいなくなった事に悲しむあの人が嫌いだ。なんで自分を捨てた人を未だに想っているんだ、もっと近くに貴女を想っている女がいるのに。

身勝手な零那先輩が嫌いだ、そんな零那先輩を想っているあの人が嫌いだ、勿論あの人を想っている自分も嫌いだ………想い人の幸せを喜べず、不幸に喜ぶ自分が1番嫌いだ。

そして、過去は今、現実になろうとしている。

だとしたら、私が過去を捨てるのは——今しかないんだ！

私は『ひまり』で、私は『マリ』だから。

現実世界の私は、決して仮想世界にも劣っていない！

「柚希先輩、最近、何か悩み事……ないですか？」

「悩み？ ……さあ、特には思いつかないわね」

「そうですか……じゃあ、最近ちよつと暗く感じたのは、私の気のせいだったんですね」

「私が暗い？ ちよつと、ひまりったら私に対して過保護じゃない？」

「この間だって、急にチャットで悩みあったら聞くなんて送ってきたし」

「すみません……柚希先輩が、零那先輩が帰ってきたと聞いたようなので。つい」

柚希先輩の、ここまで目を見開いて動揺している顔は初めて見た。

初めて会った時から年上の、ちよつと口うるさいけどお節介焼でかつこつけな先輩のイメージしかなかったから。

でも、これでようやく私が状況を知っているという事を知ってもらえた。

一体、何に悩んでいるのか知らないし、本当は部外者な私は完全に余計なお世話だろうけど……今回だけは逃げるつもりは無い。

また知らないところで傷付けられて終わってたなんて、そんな結末を許すものか。

交ぜる気が無いなら自分から飛び込んでやる。

「……そう。ひまりも聞いたの」

「はい。頼み込んだら、リンゴンが教えてくれました」

「そう、そう……そう、ね」

「悩み事、零那先輩に関係してますよね？ 今度はどうしたんですか？ 私、何か力になれる事はないですか……？」

「ああ、零那ね……うん、確かに関係している事もあるわ。でも、それ

だけじゃないの」

「それだけじゃ、ない？」

「そう、それだけじゃない……私ね、先週の日曜日に事務所へ行ったの」

「はい」

「そこで、零那と会ったわ」

ああ、もう既に遅かったのか。

柚希先輩は、もう既に零那先輩から傷付けられてしまったのか。

先週は予定が入ったから昼からの定期配信が出来ないと、その代わりに少し遅れて梓を取ると言っていたけど結局都合が合わないから無しになったとしか言っていないかったけど。

私が送ったチャットは、無駄だったのか……！

「そこで、何があったんですか……？」

「私はその日、メモリーズ運営に会議を行うから直接事務所に来て欲しいと呼び出されたわ。そこで起きた事は、言えないけど」

「それは……私が役立たずだから」

「じゃなくて、普通に考えて会議の内容なんて話せるわけがないでしょう？ まあ、会議の内容は今そこまで関係無いから置いておくにしても……そこで色々あってね」

「それを！ それを、私に話してほしいんです……！」

「だから、言えないのよ」

「なんで！ 私は……ただ柚希先輩が何に悩んでいるのかを知りたくて……！ 貴女が苦しんでいる姿なんて見たくなくて……それで……！」

「ひまり……」

駄目だ。

泣くな、泣くな。

私は『マリ』だから、『ひまり』になっちゃ駄目だ。

名前を呼ばれて揺らいだけど、踏ん張らなくちゃ。
私が泣いて何になる？ 泣きたいのはあの人の方だろうか？

「もう、何も出来ないで終わりたくないんです！ あの娘に対しても、貴女に対しても何もできなかった私が嫌で仕方ないんです！ 本当にも少しでもいいんです、どんな事でもいい……何かできる事はないですか!? うざったいのは百も承知です！ それでも……私には……もう、後悔だけはしたくないんです！」

「ひまり、あなた」

「お願いです、お願いです……」

「……ふふっ。相変わらず泣き虫なんだから」

ひどい。

今も昔も泣いてなんかかないのに。

泣いちゃ駄目なのに。

私よりもっと泣きたい人がいるはずなのに。

なのに、なんで。

「……なんで、笑ってるんですかあ」

「別に。笑ってなんかないわよ……ふふっ」

「うそつき」

やっぱり、柚希先輩は笑ってる顔が1番似合う。

私の顔なんか見て笑ってくれるなら、笑われてたっていいや。

……だって、柚希先輩の笑ってる顔なんて久しぶりに見た。

「あのね、ひまり。私、今とても悩んでいる事があるの」

「はい……」

「でもね、それをあなたに言う事はできない。なぜならこれは、私からどうしたいかという事だから……私が決めるべきなの」

「それでも、相談くらいはいいじゃないですかあ」

「そうね、もしかしたら相談くらいはするかもしれない。でも自分の人生の事は、最後に決めるのは自分自身じゃないといけないから。ひまりにも、零那にも、他の誰にも決めさせるわけにはいかないの。そうしないと私は、今まで生きてきた私を否定する事になってしまう」

たくさん傷付いたはずなのに、柚希先輩はどこまでも前を見ていた。

「かっこいいと思った。追いつかれた過去に抗おうとするその姿勢が。」

敵わないと思った。結局、私なんかにはできる事は何一つなく今回も終わってしまいそうで。

そしてやつぱり、私が恋焦がれ憧れた人は……とても素敵な人だった。

「だからね、ひまり。ちょっとだけ待って。もし助けが必要な時は、あなたを呼ぶから……その時はお願いね」

「はい……！ はい……！」

「あーほら、そんなに泣かないの！ まったく……ちよつとはかっこよくなったと思ったのに、鼻水垂れてきたら台無しよ？」

「えっ、私が、かっこいい……？ ……ていうか、鼻水なんて垂らしてません！」

「はいはい、さっさと顔洗ってきなさい。私は先に布団の準備しておくから」

「うそ、鼻水……ていうか、かっこいいって何？ 誉め言葉？ う、嬉し……くは、ない」

「せっかく一緒に布団で寝てあげようと思ったのに、鼻水まみれの人とはお断りだからね？」

「えっ、柚希先輩と、い、一緒の布団で……?」

「さっきあんたも言ってたでしょ、そろそろ夜も冷えてきたから。ね、ちようどいいじゃない?」

「どうやら、明日のオフコラボは睡眠不足が確定したようで……なんて。」

「わわわわかりました今すぐ顔洗ってきます!」

「はいはい………ありがとね、ひまり」

嵐の前の

待ち合わせの時間までもう少しあるし、と思って歩きを遅めたあたしは悪い女だ。

でも仕方ないよね、こうして2人で外を歩くのなんて随分と久しぶりだし。

「花菜、どうかした？」

あつ、気付かれない程度にしたつもりだったのに気付かれてしまった……素直に答えるのも恥ずかしいけど、変に気を遣わせるのも嫌だしなあ。

仕方ない、ここは何でもない風を装って。

「ううん、何でもないよ。へーきへーき」

「そう？ 私も、もう少し花菜と2人で歩きたいから気にしてないけど」

……いや、理由までばつちり気付いてるじゃん。

誤魔化した私が余計に恥ずかしいんだけど。

「顔赤くしちやって、かわいい」

「うっさい。お姉ちゃんのか」

そう言っただけを向いても、姉は優しく微笑んでこちらを見つめるままだ。

あたしも口ではうっさいだの馬鹿だの言っているけど、しっかりと手は繋いだままだし。

そもそも、今のあたし達の間で隠し事なんて不可能ではないだろうか。

前の様にあたしが暴走したりしなければだけど、つないだ手の先か

らきちんと絢華を感じているから……そう、きつともう大丈夫。
あたし達は、もう大丈夫だ。

「そうね、きつともう大丈夫」

「うん、そうだね……」

「行こうか。まだ時間はあるけど、柚子は待たせたらうるさそうだし」
「ねえ、お姉ちゃん」

でも、1つだけどうしても確認しておきたい事はある。

「また、一緒に出かけてくれる？」

「……今度は、最初から最後まで2人で出かけようか」

「約束だからね！ 絶対に！」

久しぶりだったから浮かれていたけど、2人で出かける機会は今日
だけじゃないんだ。

だったら、こうしちゃいられない！

今日はあたし達2人だけじゃなくて4人で遊ぶ日なんだから、少し
でも多く遊ぶ為に早く行かなくちゃ！

「よし、今日は楽しむぞー！」

「おー」



「で、遅刻した言い訳くらいは聞くけど？」

遅刻しました。

いや、違うんですよ。

あんだだけ気合い入れて遊ぶぞー！ とか言ってたのに遅刻とかって思いかもしれないけど、これには深いわけがありました……

「あ、あのですね……」

「何」

「今日ってあたし達、事前に待ち合わせしてここに向かって来たわけなんですけど……その、バスとか電車を使うほどの距離でもない歩いて向かおうって事になったんですよ」

「ええ」

「でも！ 今日に限って、やたらと信号につかまったりとかしてですね……少し時間に余裕をもって出てきたはずなのに、気付いたらちよつとだけ遅刻しちゃいました……」

「あー、あるあるだよな。ちよつと余裕あるからって油断したらアクシデント続きで、意外と時間ぎりぎりになること」

「そうね、あるあるかもね」

ううっ。マリ先輩（たぶん）がフオローしてくれて、柚子ちゃん先輩（たぶん）も納得してくれている……っぽい。

だけどあたしは知っている。

口では納得している風だけど、実は柚子ちゃん先輩は納得していないって事を……！

「私はてつきり、2人でいちやつきながら来たから遅刻したのかと思ってたわ。そういう理由なら仕方ない、とは言えないけど。でも次からは気を付けるのよっ」

「あつ、はい。ごめんなさい」

そういう部分が無いとは言えない、というか実際そうだからちよつと後ろめたい……。

多分だけど柚子ちゃん先輩もわかってるし、マリ先輩も苦笑いしてるから、きつと気付いててもスルーしてくれているんだろう……それが余計に申し訳ない。

あたし達がほんの数分とはいえ遅刻したせいで、予定が押し始めているんだ。

こちらが悪いとはいえ、必要以上につつかないで貰う事に感謝しなくちゃ。

「予定より時間が押し始めたのに後輩に説教するなんて、柚子は相変わらずだね」

「いやいやいや、彩華つてば空気読んでよ!？」

柚子ちゃん先輩も顔引き攣つてきたし、マリ先輩はあちゃーって顔してるし……でも、彩華としては特に悪気が無いんだよなあ。

「……早川、あんたしっっかり教育しておきなさいよ」

「あははー、ユキは相変わらずだねえ」

「あの、本人に悪気があったわけではないんで……」

「ええ、ええ。大丈夫よ早川、私はちゃんとわかっているわ。だってこれが初めてじゃないから」

「あっ……」

「いやいや、本当にこの姉はもう……」。

あたしがまだメモリーズ4期生として加入する前、それこそ『灰猫ユキ』としてデビューした直後から柚子ちゃん先輩には色々とお世話になっているんだろう。

実際、この間の『はやラジ!』でも手のかかるメンバーとして名前をあげていたし。

「でも、私が面倒を見る役割も終わりね。これからは早川がユキ係を引き継いでくれるようだし」

「うん。頼んだよ、はやて」

「ユキちゃんも自分で頼んだとか言わないの！ ……その、別に嫌じゃないけど」

「あつ、また惚気だ」

「まったく。いつでもどこでも関係ないんだから」

「そんなつもりは全然ないのに！」

「ていうか、『また』って何よ、『また』って！」

「あたしたち、そんなに人前でいちやついてるつもりないんだけど
……？」

「それは無理があるんじゃないかなあ？」

「さらっと心を読まないで貰えます!?!」

「顔に書いてあったわよ」

「うん。はやては何考えてるかわかりやすいよね」

「そりゃ彩華からすれば、ほとんど皆が何考えてるかわかるでしょ!?!
遅刻して謝ってた流れから、いつの間に関に私が弄られる流れになって
しまったんだ……。」

「あーもー！ とりあえず、いつまでもここに居るわけにもいかない
し、早く行きましょうー！」



今日、あたし達が集合場所に選んだのは大型商業施設の入り口だった。

予定としては、まず施設内にある映画館で映画鑑賞をしてからちよつと早めのランチを済ませて事務所へ行く、といった非常にシンプル（悪く言えば大雑把）なものだ。

あたし達がちよつとだけ遅刻してしまったとはいえ、その時間はほんの数分——むしろその後のやり取りの方が長かったような気がするけど、まあそれは置いておいて。

それを抜きにしても、待ち合わせの時間と映画の上映予定時間は余裕をもっておいたので問題はないはず。

「今日は予定を立ててもらって悪かったわね、早川」

「いえいえ！ あたしが偶々見たい映画があっただけなんで、全っ然大丈夫です！」

「元はといえば、私がコラボしようって誘ったようなものだし……やっぱり私が今日の予定も考えるべきだったんでしょうけど」

「あー、あれは……確かに柚子ちゃん先輩がコラボしようって誘ったことになるんですかね？」

映画館に向かう途中、あたしは柚子ちゃん先輩と並んで歩いていった。少し前にはユキちゃんとマリ先輩が並んで歩いている。

いつもの通りならば——あたしがユキちゃん以外とオフコラボをするのは初めてだけど——あたしとユキちゃん、柚子ちゃん先輩とマリ先輩で組むのが普通だろう。

あ、もちろん先輩2人を嫌っているわけではないけど。

「でも意外でした。柚子ちゃん先輩が、あたしと一緒に歩きたいなんて」

「ああ、別に用事があったわけじゃないの」

「え？」

「ただちよつと、ね……」

そうやって柚子ちゃん先輩は話を切ってしまった。

あたしに用事があるわけじゃないのに、一緒に歩くことを提案してきたなんて不思議だけど……何か違う目的があった？

どういう事だろうと思って柚子ちゃん先輩の方を見ると、視線は前に向けながら——ユキちゃんとマリ先輩の方へ注がれていた。

「もしかして、ですけど……あの2人を一緒にさせたくて？」

「……」

肯定はなかったけど、否定もなかった。

「……元々ね、これが目的で今回のオフコラボをしようって言ったの」

「え……？」

「だからね、ごめんなさい。あなたに予定を組んでもらったのも、本当はちようどよかったの。私、別にこのオフコラボでやりたい事とかなかったから」

「はあ」

「勿論やるからには全力で挑むから、そこは安心して」

ちよつと待って。

柚子ちゃん先輩の目的は、4人でオフコラボをするというよりも、ユキちゃんとマリ先輩を引き合わせる事？

でも2人は、別にこれが初対面ってわけじゃないし……何が目的？

まさかとは思うけど、本当にまさかだけど……

「あの、柚子ちゃん先輩。もしかして、ですけど……ユキちゃんとマリ先輩をくつつけようとしてますか？」

「当たり前だけど、多分ハズレ」

「意味がわからないです」

「でしようね」

そう言つて柚子ちゃん先輩は随分と久しぶりに、それこそ並んで歩

いてから初めてかもしれないけど、こちらに視線を向けた。

その顔は少し苦笑気味で、よく前方を歩く2人に向けるものとよく似ていた。

「ねえ、早川。私達、今日集まっただけからとても重要な確認をし損ねているわよね？」

「な、なんですか」

「私と前の2人はお互い知っているけど、あなたと私とマリはお互い知らない事——あなたの、こっちで使っている名前」

「……そう、ですね」

「当然だけど、ここは周りに身内しかない状況じゃないから身バレ防止の為に必要な事なのよ」

「……」

「でもね、私はそれ以上に……仮想と現実の区別は付ける物だと思っているの」

仮想と現実の区別。

それはつい最近、どこかで聞いたことのある——いや、自分が体験したこと。

あたしが犯してしまった、消える事の無い罪。

「仮想世界に生きる私と、現実世界に生きる私は表裏一体。だけどイコールで繋げてはいけないのよ」

「そうですね……よく知ってます」

「ええ、そうでしょうね。目の前の相手が自分の姉なのか、それとも慕っている先輩なのか、もう見間違える事はないでしょう？」

「し、知って……!」

「私を誰だと思ってるのかしら……といっても、知ったのはあなた達が騒いだ時だけだね」

まさか、運営以外に知っている関係者がいたなんて……!

何がまずいのかわからないけど、直感でまずいと思った。

恐らくそれは、様々な要因が絡み合っただけで出た危険信号だったんだろうけど……それを知ってなお、柚子ちゃん先輩のこれまでの態度から、この人は安全なのではと思ってしまおう。

「何も言わないんですね」

「運営は何考えてるんだって思ったけどね、あなた達には別に。言いたい事はその時に言うようにしてるから、あなたにはこの間コラボした時に言った分で終わりよ」

「……気持ち悪いとか」

「自分で自分を傷つけるのはやめなさい。あなたが傷ついて一番悲しむのは誰だと思う？」

やばい。泣きそう。

認めてもらえて普通に嬉しい。

柚子ちゃん先輩は軽く微笑むと、また視線を前に向けた。

「……ただのお節介なのよ」

「それは、あの2人のことですか？」

「高校の同級生で、しかも同じクラスだったんですって」

「そ、それって本当ですか!？」

「あっちは覚えてないみたいだったけど、って言ってたわ。でもね、あいつは……ひまりは私と出会った大学1年の頃からずっと後悔してた。自分は何もできなかった、見てるだけだったって」

「……」

「この事務所に入ったのは、まあ私を追いかけてきたからみたいだけ。だけど、偶然にも2人は同じ企業の同期としてデビューする事になってしまった」

「そうだったんですか……」

「いい加減にね、あの娘を過去から解放させてあげたいの」

彩華はあの頃を特にどう思っていたわけでもないみたいだけど、あの頃に囚われていた人は、実は別にいたんだ。

だとしたら、あたしも……彼女には前を向いて欲しいと思う。

彩華が気にしていない以上、マリ先輩の自己嫌悪だけが問題だろうし……彩華にとってもユキちゃんにとっても、彼女は友人といつていい人物だろう。

想い人の友人が苦しんでいるのなら、救われて欲しいと願うことに何も躊躇などない。

「大丈夫です、きっと彩花が解放してくれます。だって……あたしの自慢の姉ですから！」

「そうね、これで少しはマシになってくれるといいんだけど……ダメだったら、その時は今度こそ尻を叩いてやらなくちゃ」

そう言いつつも、あたしも柚子ちゃん先輩も前に行く2人の様子を見る限り、そんな心配は何もいらないと確信していた。